【登場人物表】

島藤　瑞美（１７）　高２・演劇部の部長
富岡　旺次郎（１７）　高２・演劇部の部員
林　ろめお（１８）　高２・演劇部の部員
大澤　久麗亜（１７）　高２・元演劇部員
山科　創人（１６）　高１
菊ヶ谷　雄（１７）　高２
次原　灯（１６）　高１・瑞美の幼馴染
額御影　元也（３８）　詐欺グループのボス

支配人（５０）　小劇場の支配人・ろめおの父
瑞美の母（４３）　個人投資家
山科　賢（４５）　小説家・創人の父
灯の母（４２）　電器店の店員
宇都宮　悠磨（３２）　教師・瑞美の担任
橘　正華（３５）　刑事

○　小劇場・事務所（夕方）
色褪せた『マクベス』のポスターに
西日が差し込む古びた劇場の事務所。
壁にはヒビ割れを隠すように飾られ
た１２月のカレンダーがある。
笑顔の男性支配人（５０）の前には男
性の建築業者（４４）と都内の区役所
の名札を付けた男性職員Ａ（４７）。
テーブルの上には『耐震補強工事補助
金申請書』と補助金も合わせて総額で
１千万円程の改装工事の契約書。
業者「……では、明日施工開始となりますので」
支配人「（関西弁で）いよいよやなー。じゃあ
区役所さん頼んだで、補助金」
職員Ａ「（笑顔で）はい。工事完了後に申請書
の口座に振込させて頂きますね」
支配人「ホンマに助かるわー。それに、教えて
もろうてありがとな、改修と同時に耐震工事
も出来るって事。そのおかげで借金する決心
ついたからな、改装工事用の１千万円」
職員Ａ「いえ、お役に立ててなによりですよ。
良かったですね、今よりも客席増やせて」
支配人「ホンマや。悪夢の様なコロナのヤツも
一段落ついたし。また夢ある若者達に綺麗な
劇場用意出来るわ。皆喜ぶやろな……」
満面の笑みで棚を見上げる支配人。
劇団の写真盾が並ぶ棚の一番端には
高校の演劇部の写真盾がある。
そこで業者が『マクベス』のポスター
に気付く。
業者「お……シェイクスピアのマク……いや、
『あのスコットランドの劇』ですね」
支配人「え、よくご存じやな『マクベスの呪い』」
業者「ええ、実は学生の時カジってたもんで」
職員Ａ「何ですか？　呪いって」
業者「昔から不幸な事が起こってきたんです、
劇場で題名言うと。だから皆その代わりに
『あのスコットランドの劇』って呼んでて」
職員Ａ「え、そうなんだ。で、でもさっき題名
言ってませんでした？　支配人」

支配人「ハハハ、大丈夫やって、日本のこんな
小さな劇場でそんな事言うたかて。あらへん、
あらへん、マクベスの呪いなんか。ガハハハ」
豪快に笑い飛ばす支配人。
職員Ａと業者も顔を見合って笑う。

○　同・前の道（夕方）
商店街の人混みに消えて行く職員Ａ
と建築業者を笑顔で見送る支配人。
ふと電信柱を見るとそこには『補助金
詐欺に注意！』という文言と紙幣の肖
像画が老婆と若い女性の両方に見え
る騙し絵が描かれた啓発ポスター。
支配人はギョッと目を見開くと慌て
て財布から『建築課　利根田吉彰』と
書かれた名刺を出して電話を掛ける。

○　区役所・建築課（夕方）
女性の職員Ｂ（２６）が電話に出る。
職員Ｂ「はい、建築課でございます」

○　小劇場・前の道（夕方）
焦りの表情でスマホを握る支配人。
支配人「あ、あの、そこの建築課に利根田吉彰
さんって方おられますよね？」
職員Ｂの声「はい。でも今は外しておりますが」
支配人「そうですか。そやったらいいです……」
ホッとしながら電話を切る支配人。

○　区役所・外観（朝）
午前の日差しが当たる翌朝の区役所。

○　同・建築課（朝）
職員Ｂのいる受付カウンターに血相
を変えた支配人が駆け込んで来る。
支配人「と、利根田、利根田吉彰さんおるかッ！」
職員Ｂ「ど、どうされました？」
支配人「けーへんのや、改装工事の業者ッ！
連絡もつかんし、一体どうなっとんのやッ！」
職員Ｂ「よ、呼びますのでお待ち頂けますか」

慌てて奥に向かう職員B。
支配人は大きく息をついて汗を拭う。
利根田の声「お待たせ致しました利根田です」
素早く振り返る支配人……と、目の前に立っている利根田吉彰（５９）は職員Aとは全くの別人である。
支配人「そ、そんな……あ、あった……ホンマにあった……呪い、マクベスの呪いや……」
支配人は愕然とした表情でその場に膝から崩れ落ちてしまう。

○　タイトル
『演劇部騙しい！』

○　高校・教室
教卓の花瓶には寒椿が飾られている。
曇り顔の教師の宇都宮悠磨（３２）の前には島藤瑞美（みずみ）（１７）がいる。
机の上にある『進路希望調査票』には『舞台役者』の文字。
宇都宮「……本気なのか？　瑞美」
瑞美「はいマジです。宇都宮先生」
宇都宮「コロナで一番打撃を受けた職種だぞ。おかげで演劇部にも入って来なかっただろ、新入部員。忘れたのか？　廃部決まった事」
瑞美「それは……偶然重なっただけかと……」
宇都宮「テストも赤点増えてるし、部長の仕事も無くなったんだからもっと真剣に……」
瑞美「（遮って）もう決めたんで。てか先生言ってましたよね？　将来の目標決めろって」
宇都宮「何でもいい訳じゃないからな、目標は」
瑞美「目標っていうか夢なんですッ！　子共の頃からのッ！　叶えたいんです絶対にッ！」
宇都宮が溜息交じりに窓の外を見ると目線の先の庭木の枝に鳥が止まる。
宇都宮「……いいか、目標と夢を一緒にするな。目標ってのは鳥が掴まろうとする枝を見定めて飛ぶことで、夢は人が空を飛びたいって思う事だ……飛べないだろ？　瑞美は」

瑞美「え、はい……む、無理です……で、でも
『どんなに長くとも夜は必ず明ける』です」
宇都宮「……ハ、何だソレ？」
瑞美「シェイクスピアのセリフです。だから、
頑張ってればいつか必ず叶うはずです、どん
なに無理な夢でも」
宇都宮「（鼻で笑って）なら結局覚めるんじゃ
ねーのか？　夜が必ず明けるんだったら朝
目覚めた時に夢も一緒に」
瑞美「え、そ、それは……」
宇都宮「まあ、早く現実的な目標を持つんだ。
夢が覚めた時に気付いても遅いんだぞ、自分
は人生の負け組だったんだって事に」
瑞美「え……ま、負け組……？」
宇都宮「そう。頭悪いって思われるぞ、そんな
生き方してたら。もっと大人になって早く身
に着けないとな、頭の良い人間の生き方を」
悔し気な表情でうつむく瑞美。

○　同・演劇部の部室前の廊下（夕方）
西日の当たる部室のドアにはスプレ
ーで『祝廃部！　えんげキモ部！』と
書かれた悪意に満ちた落書きがある。

○　同・演劇部の部室（夕方）
壁には『一幕入魂』と書かれた使い込
まれた横断幕が張ってある。
撤収作業中で荷物を片づける瑞美と
イケメンの富岡旺次郎（１７）がいる。
旺次郎「……そっか、負け組か……」
瑞美「……オージは？　大学出たら韓国行って
韓流映画に出るんだって言ったの？」
旺次郎「うん……でも、韓国は競争率高そうで
ムリだから諦めるか、最悪やるなら日本のパ
パの芸能事務所でやれば？　って宇都宮が」
瑞美「枝に掴まらせる気だな、ギョーザの奴」
旺次郎「ギョーザマジ最悪。教師失格じゃね」
瑞美「だな。実は子供は皆シューマイ推しだぜ」
旺次郎「実は宮崎と浜松に消費額抜かれてるぜ」
瑞美「実は虫のサナギみたいって言われてるぜ」

旺次郎「実は具よりパリパリの羽根が好き、
とかも言われてるぜ」
悪口を言い合ってほくそ笑む二人。
そこへ小太りの林ろめお（１８）が
不機嫌そうな顔で入って来る。
旺次郎「あ、遅かったっすね、ろめお先輩」
ろめお「お疲れ……ってまだ作業終わってねー
のかッ？　この赤点ポンコツ無能部長ッ！」
瑞美「ハア？　アンタの荷物が多いからでしょ」
ろめお「しょーがねーだろが、俺は一年長くい
んだからッ！　てかタメロおかしくねッ？」
瑞美「いーでしょ。留年してタメなんだから」
ろめお「ク、クソ、先輩を敬えブチョミッ！」
瑞美「ブ、ブチョミ言うな、タメオッ！」
ろめお「タ、タメオッ？　ふ、ふざけんな後輩
のくせにッ！　赤点無能部長のくせにッ！」
激しく睨み合う瑞美とろめお。
旺次郎「(焦って)せ、先輩、ギョーザなんて？」
ろめお「ん……それが将来芸人になるって言っ
たらもっと現実見ろってメチャキレられて、
完全に焼きギョーザ状態だった……」
瑞美「でしょーね」
ろめお「でも俺は芸人諦めねーからな、絶対に」
旺次郎「てか瑞美、ママに話した？　進路の事」
瑞美は途端に顔を曇らせて首を振る。

○　瑞美の家・外観（夜）
郊外にある明かりの灯る公営団地。

○　同・居間（夜）
狭めの部屋の本棚には乱雑に置かれ
た投資関係の本がある。
その傍には株価チャートが表示され
たＰＣの前にカップ麺を手にした太
めの体系の瑞美の母（４３）がいる。
瑞美の母「クソ、下がってんじゃねーかッ！
嘘ばっかつくなこの無能専門家がーッ！」
手元にある本を投げ捨てる瑞美の母。
本が転がった先にはドアの前に曇り
顔で立つ瑞美がいる。

瑞美の母「(画面を見たまま) ……絶対ダメだ
から演劇とか。もっと人の役に立つ仕事して」
瑞美「……役に立つし、演劇だって」
瑞美の母「どこが？　自己満目的職業でしょ。
大体夢とか数値化出来ない事言ってないで
もっと社会的生産性の高い仕事してッ！」
瑞美「……役に立ってるんだ、ママの仕事は」
瑞美の母「当然でしょ。経済動かしてんだから」
瑞美「自分は全然動かないのに？　机の前から」
瑞美の母「合理的かつ効率的に結果出す為よ。
こういうのが頭の良い人間の生き方だから。
頭悪いんだって、夢追ってただ頑張るとか」
瑞美「ハ……頭悪い？　ど、どこがよッ！」
瑞美の母「全部だって、早く大人になれッ！
てか覚えてる？　色々習い事させてきたの」
瑞美「え、う、うん……それがなに？」
瑞美の母「……絶対許さないからね、投資した
カネ全部回収出来なかったら」
瑞美を睨みつけながら乱暴にカップ
麺をすする瑞美の母。
瑞美は「え……」と愕然と立ち尽くす。

○　演劇部の部室（夕方）
西日の差し込む部室で瑞美が曇り顔
で撤収作業をしている。
傍には旺次郎とろめおもいる。
旺次郎「そっか、ママも反対か……」
瑞美「あんなんだから捨てられたんだ、パパに」
ろめお「でもいーじゃん、株で稼いでくれりゃ」
瑞美「(首を振って) 全然。気付いて無いから、
投資のセンス無いの。習い事だって私の興味
無さそうなことばっかやらせてきたし……。
てか、何で令和の大人って自分と他人比べて
頭が良いとか悪いとかばっか気にすんだろ。
そんなの騙し絵と一緒で判断する人次第で
見え方が変わってくるだけのモノっしょ。
だって、アインシュタインからしたら人類は
自分以外全員頭が悪い、って事になるでしょ」
旺次郎「それな。正に相対的思考」
ろめお「てか、人類全員頭悪いは草」

瑞美「だからそんな無意味な事気にしてるヤツが一番頭悪いんだって。それに現実的な生き方しないで夢追うのが頭悪いんなら二刀流の夢叶えた大谷サンも、飛行機で空飛ぶ夢叶えたライト兄弟も、人種差別政策を無くす夢叶えたネルソン・マンデラもみんなみんな頭が悪いって事になるじゃんッ！」
ろめお「ま、そーなるな。知らんけど」
瑞美「って事はそーいう時代を動かしてきた人達が全員頭の良い現実的な生き方してたらどーなってた？　二刀流も無いし、飛行機も無いし、人種差別だって酷いままでしょッ！だから実は一生懸命に夢を追ってあえて頭の悪い生き方を選ぶ人間が切り開いていくもんなんじゃないの？　時代って奴はッ！」
旺次郎「うん、確かにそうかも」
瑞美「でしょ。だから私は絶対に諦めないから、舞台役者の夢を叶える事をッ！」
ろめお「まーまーまー。そー熱くなんなって。てかオージ、コレ全部持って帰れよ」
本棚に何冊も残っている韓国語講座の本を指さすろめお。
旺次郎「あ……了解っす」
ろめお「って、話せるようになったの？　お前」
旺次郎「（韓国語で）ハ？　当然だろが、お前」
ろめお「ハ……な、なんて？」
旺次郎「勿論です、尊敬する先輩……って」
ろめお「そっか。やっぱオージは良い奴だな」
旺次郎「（微笑みながら韓国語で）バーカ。もう留年なんかすんなよ」
ろめお「ハハハ、そんな褒めんなって」
満足気な笑顔のろめおを見て必死に笑いをこらえる旺次郎。
瑞美は韓国語講座の本の近くにある演劇雑誌を取って開く。
瑞美「……この号だっけ、あの子載ってんの」
旺次郎「あー、天才劇作家クンな」
ろめお「「天才ってか遺伝な。親父が小説家で母親は劇作家だろ。でもメチャ面白かったな、老人が詐欺師に復讐してお金取り戻す話」

『全日本戯曲大賞　大賞　山科創人
東京蛍雪高校１年』の見出しの記事
には大人達に囲まれた山科創人（１６）
の写真が載っている。
旺次郎「確か初だっけ、高校生で大賞って」
瑞美「こっちは廃部だもんね、へコむわ……」
ろめお「でも、廃部はマジ残念だけどおかげで
俺はコントの勉強に専念出来るけどな」
瑞美「ハ、何言ってんの？　まだ終わんないし」
ろめお「へ……どーいうこと？」
瑞美「演劇部続けるの、タメオパパの小劇場で。
もう話ついてるし」
ろめお「マ、マジか、いつの間に……」
旺次郎「てことはいつものチャリティー公演？」
瑞美「うん。でも舞台立つのはまだ先だけど」
旺次郎「あ、改装工事するんだっけか」
瑞美「そう。だからその間にメンバー増やそ。
で、メチャ練習して舞台立つの。私はママに
分からせるまで絶対に辞めないからねッ！
演劇だって必ず人の役に立つんだからッ！」

○　警察署・外観（夕方）
西日を浴びる都内の警察署の全景。

○　同・刑事課（夕方）
調書を取る女性刑事の橘正華（３５）
の前には肩を落とした支配人がいる。
橘「……１千万ですか、大変でしたね……では
劇場の防犯カメラ確認させて下さい」
黙ったまま力無くうなづく支配人。

○　小劇場・入口（夜）
明りの消えた小劇場に瑞美と旺次郎
とろめおがやって来る。

○　同・事務所（夜）
支配人と橘と刑事Ａ（男・３１）と
刑事Ｂ（女・２８）が職員Ａと業者の
映った防犯カメラの映像を見ている。
橘「（首を捻って）……知らない顔だな」

刑事Ａ「ですね……新手の組織ですかね？」
支配人「（ガッカリと）……そうなんや」
　そこへ瑞美達が入って来る。
瑞美「（驚いて）え、待って。なに……？」

○　同・通路（夜）
　瑞美達と支配人が話している。
ろめお「（関西弁で）オ、オトン嘘やろッ？」
支配人「ホンマや。1千万円騙し取られた……
　やからここは閉めるわ、借金返さなあかんし
　……そういう事なんで悪いな、瑞美ちゃん」
瑞美「い、いえ……」
支配人「やからろめおも芸人諦めて働いてくれ、
　高校卒業したらすぐにな……」
ろめお「……う、嘘や……そんなん嘘や……」
　愕然とした表情のままその場に崩れ
　落ちるろめお。
　瑞美と旺次郎も深刻な顔でうつむく。

○　瑞美の高校・外観（夕方）
　西日の当たる都内の高校の全景。

○　同・演劇部の部室（夕方）
　ほぼ荷物は無くなり、曇り顔で掃除を
　する瑞美と旺次郎とろめおがいる。
ろめお「……終わりだな、マジで」
旺次郎「てか……何で学校だと標準語？」
ろめお「いーだろ。今ソコつっこまなくても」
　瑞美は壁に最後に残った『一幕入魂』
　の横断幕を黙って見つめている……
　と、突然ハッと思いつく。
瑞美「……ね、ねえ、よくない？　取り戻せば」
旺次郎「え？　取り戻すって……？」
瑞美「1千万円。犯人は区役所の人の演技して
　たんでしょ、なら逆にうちらも演技してさ」
ろめお「マ、マジかッ！　詐欺師騙すって事？」
瑞美「出来るよ。一幕入魂、演劇部魂があれば」
旺次郎「でも……犯罪じゃないの？　ソレも」
瑞美「でも詐欺師の奴等は奪い返されても警察
　には言わないっしょ、元々騙し取ったお金は」

ろめお「まあ、そーかもだけど危険過ぎるって。
なあオージ、パパに頼んでみてくれねー？
1千万円なんとかならねーかって」
旺次郎「え、でもそんな大金勝手に動かせない
と思うけど、只の雇われ社長なんで」
ろめお「（残念そうに）そ、そっか……」
旺次郎「瑞美、他の劇場とかは？」
瑞美「（首を振って）ダメ。高校生だからって
……てか私許せないんだ、楽して大金稼ごう
とするヤツ全員ッ！　タメオはいいのッ？
このままじゃ芸人諦めるしかないよッ！」
ろめお「そ、それはそうだけど……」
瑞美「うちらでなんとかするしかないっしょ、
親も教師も誰も当てに出来ないんじゃッ！
劇場救って証明しようよ、演劇だって人の役
に立つんだって事をさッ！」
ろめお「……じゃあどーすんだよ？　騙すって」
瑞美「大丈夫、私いつも台本書いてんだから。
えっとそーだな……（うーん、と考える）」

○　商店街（夕方・瑞美のポンコツ妄想）
古びた建物の前に不似合いな探偵風
のトレンチコート姿の旺次郎がいる。
瑞美のN「まず、劇場と同じ様な古い建物を見
張るの。詐欺師は絶対また現れるハズだから」
そこへ職員Aが建物から出て来る。
アンパンと牛乳を持って追う旺次郎。

○　キャバクラ（夜・瑞美のポンコツ妄想）
札束を手に豪遊する職員Aがいる。
そこへキャバ嬢に変装した瑞美が現
れる。（背伸び感満載でイケてない）
瑞美のN「そこで、私がセクシーキャバ嬢の演
技をして詐欺師から電話番号を聞き出すの」

○　演劇部の部室（夕方・瑞美のポンコツ妄想）
只の高校生のろめおが電話を掛ける。
瑞美のN「で、オレオレ詐欺を仕掛けて……」

○　詐欺師の家（夕方・瑞美のポンコツ妄想）

受け子役で高級スーツ姿の旺次郎が
札束の入った紙袋を持って出て来る。
瑞美のN「見事１千万円ゲットーッ！」

○　演劇部の部室（夕方）
ドヤ顔でニヤつく瑞美……しかし、旺
次郎とろめおは呆れ顔。
ろめお「……やっぱ無能だな、ポンコツ部長」
瑞美「(ムッとして)ハ、ハアッ？　何でよッ？」
旺次郎「だって高校生じゃキャバ嬢は……」
瑞美「そこは……確かな演技力とフェロモンで」
ろめお「両方ねーだろ。てか俺も変装させろ」
瑞美「ハア？　出して貰っただけ喜べッ！」
旺次郎「てかそもそも引っ掛かる？　詐欺師が
オレオレ詐欺に」
瑞美「ん、そ、それは……」
ろめお「そーだ、有り得ねーって。知らんけど」
瑞美「じゃあどうすんのッ？　役者も芸人も諦
めて負け組にさえなれないまま終わる気？」
ろめお「い、いや、それはまあ……」
困り顔でうつむいた旺次郎が目線の
先にある演劇雑誌を見てハッと閃く。
旺次郎「な、ならやってみる？　この戯曲通り」
急いで演劇雑誌を取って創人の戯曲
が載ったページを開く旺次郎。
瑞美「……でも元スパイでしょ、その主人公」
ろめお「設定が違い過ぎるって、俺らとは」
旺次郎「そっか……でもダメ元で天才君に相談
してみない？　アドバイス貰えるかもだし」
瑞美とろめおは互いに「どうしようか
……？」と悩まし気な顔を見合わせる。

○　大劇団の専用劇場・外観
都内にある大きなホールの全景。

○　同・会議室
不安気な表情の創人の前には台本を
叩きつけるプロデューサー(男・４８)。
プロデューサー「無理だって、こんな本ッ！」
創人「え、な、何でですかッ？」

プロデューサー「日本が舞台じゃ無理あり過ぎ、
外国人力士がＣＩＡのスパイだったなんて」
創人「そ、そこは演出で……」
プロデューサー「てか予算オーバー。絶対無理」
創人「で、でも僕はこういう作風なので……」
プロデューサー「影響受け過ぎだって、両親の」
創人「な、何でダメなんですかッ？　この間の
コンクールじゃ皆褒めてくれたのにッ！」
呆れ顔で鼻で笑うプロデューサー。
プロデューサー「そのコンクールの審査員から
頼まれて特別に本読ませて貰ったけど……
これじゃリアル子供騙しだな……なりたく
ないの？　プロに」
創人「な、なりたいです……」
プロデューサー「だったら条件が５つある……
まずは予算を守る。次にダメ出しに耐える。
次にコンクールのことは忘れる。４つ目に受
けた仕事は絶対に途中で投げ出さない……
キミ出来る？　雇われ審査員じゃなくてさ
プロの業界人なんだよ、ここからの相手は」
ビビって思わずうつむく創人。
プロデューサー「……で、５つ目は企画は俺が
決めるからその通り書いてよ、高校生らしい
リアルなほっこりムズキュンラブコメをさ」
創人「え……む、無理です、そんなの……」
プロデューサー「ハア、何で？　リアルな世界
だろ？　現役高校生には」
創人「……いいえ……全部ファンタジーなんで、
僕には……」

○　東京蛍雪高校・前の道
校舎ではなく、無機質なビルの前に私
服姿の瑞美と旺次郎とろめおがいる。
ビルの看板には『通信制課程』の文字。

○　同・受付
ビルに入って来た瑞美達が演劇雑誌
の創人の記事が載っているページを
開いて受付の事務員に話しかける。
瑞美「あ、あの、この人と連絡を……」

○　大劇団の専用劇場・エントランス
　肩を落とした創人が出て来る。
　そこへスマホに着信がある。

○　東京蛍雪高校・受付
　電話を切る事務員。
事務員「ここに来て欲しい。とのことです」
　メモ用紙を瑞美に渡す事務員。

○　ファミレス・外観
　チェーンのファミレスの全景。

○　同・店内
　緊張気味の表情の瑞美達の前に創人が見ていたメニューを叩きつける。
創人「無理ですね、そんな計画」
瑞美「え、何でですか？」
創人「高校生だけじゃ無理あり過ぎ、演技で詐欺師騙して金取り返すなんて」
旺次郎「そ、そこはちゃんと計画して……」
創人「ならいくらですか？　予算は」
瑞美「え、まだ決めてないですけど……」
　呆れ顔で鼻で笑う創人。
創人「これじゃリアル子供騙しですね……取り返したくないんですか？　1千万円」
ろめお「(ムッとして)なんだよ年下のくせに。取り返したいに決まってんだろッ！」
創人「……でしたら取り返す為に必要な条件を5つ教えます……まず予算を確保する。次にプロの役者を最低でも一人入れる。次に機械に詳しい小道具係と……4つ目にメイク係も加える事。どちらもプロ並みのね……」
瑞美「え、自分達でやるし。小道具とメイクは」
創人「出来ます？　高校演劇の観客じゃなくて詐欺師なんでしょ、今から相手にするのは」
旺次郎「そ、それは……そうだけど……」
創人「で、5つ目は計画は僕が決めるのでその通りに動く事。全部揃えば台本考えてもいいかな。リアルに僕が書きたい話なので……」

○　同・前の道

先に店から出て立ち去って行く創人の後姿を睨み顔で見送る瑞美達。

ろめお「……クソ、ふざけんなあのガキッ！」

瑞美「ホント、条件とか出して感じワルッ！」

旺次郎「でも、確かに全部必要かもね……」

ろめお「ならＳＮＳで募集する？　条件合う人」

瑞美「ハ？　バカじゃないのッ？　拡散されたらヤバいじゃん。親とか学校にバレるしッ！」

ろめお「ハ、ハアッ？　お、お前だって無能なポンコツ妄想しか出来ねーじゃねーかッ！」

慌てて間に入る旺次郎。

旺次郎「予算は大丈夫。俺の貯金使ってくれ」

ろめお「マ、マジかッ？　さすがオージッ！」

瑞美「い、いいの？　ホントに」

笑顔でうなづく旺次郎。

旺次郎「それに当てあるだろ、プロの役者も」

ハッと気づくろめお。

ろめお「そーだ、いるじゃんうちの元エースが。オージパパの事務所所属のプロ女優がッ！」

瑞美「え……ダメ、勝手に辞めたヒトなんか」

旺次郎「でも、他に心当たりある？」

瑞美「ん……まあ……無いけど……」

ろめお「なら早速頼んでみねー？　アイツに」

途端にニヤけながら歩き出すろめお。

旺次郎と不満気な瑞美も後に続く。

そこで逆方向に歩いていた創人が立ち止まって振り返る。

キャッキャと話しながら歩く瑞美達の後姿を羨まし気に見つめる創人。

そこへスマホに着信があり、出る。

創人「はい……え、警察？」

○　交番

焦り顔の創人が走って入って来る。

女性警察官（２８）の前には創人の父の山科賢（４５）がいる。

賢「（気付く）あ、創人……良かった……」

警察官「息子さん？　山科創人くん？」

創人「は、はい……」
警察官「お父さんね、買い物に出かけたみたい
なんだけどそれさえも忘れちゃったみたい
でずっと道を行ったり来たりしてて……」

○　瑞美の高校・校門（朝）
眩しい朝日が当たる中、長身かつ美人
の大澤久麗亜（１７）が登校して来る。
そこへ校門の陰から瑞美と旺次郎と
ろめおが現れる。

○　同・中庭（朝）
ニヤけ顔のろめおと真顔の旺次郎と
曇り顔の瑞美が久麗亜と話している。
久麗亜「……絶対ムリ、断る」
ろめお「え、な、何で？」
久麗亜「何でって当然でしょ、芸能人なんで私。
てかオージはいいの？　バレたら事務所に
メチャ迷惑掛ける事になるんだよ」
旺次郎「そ、それは……でも見過ごせなくね？
久麗亜だってあの劇場の舞台立っただろ」
久麗亜「そうだけど……だったら親に頼めば？
それに今更出来ないし、無能の素人とは」
蔑むように瑞美をチラ見する久麗亜。
瑞美「（ムッとして）ハアッ？　なにソレッ！
てか決めたのッ、うちらだけでやるってッ！」
久麗亜「（鼻で笑う）相変わらず熱いね。そん
なんだからえんげキモ部って言われんだよ」
瑞美「ハ、アンタもそーだったでしょッ！」
久麗亜「（睨んで）てか絶対ムリ。今日も午後
から衣装合わせだし。忙しいんだってッ！」
吐き捨てて立ち去って行く久麗亜。
瑞美は悔し気にその背中を睨む。

○　芸能事務所・外観
壁に事務所名が書かれた看板のある
都内の繁華街にあるビルの全景。

○　同・衣装部屋

久麗亜の前には際どいビキニを持った女性マネージャー（３０）がいる。
久麗亜「え……な、何ですか？　ソレ」
マネージャー「なにって……衣装、グラビアの」
久麗亜「え、いや、ムリなんですけど」
マネージャー「大丈夫だって絶対映えるから、久麗亜のスタイルなら」
久麗亜「いや……ちょっと考えさせて下さい」

○　同・女子トイレ
個室に曇り顔の久麗亜がいる。
そこへマネージャーと女性社員（３０）がやって来て化粧台の前で話しだす。
女性社員「……どーかしたの？　久麗亜」
マネージャー「ショックだったっぽい、ビキニ」
女性社員「困るよねー、贅沢言われちゃ」
マネージャー「てかあの娘気付いてないから、同世代の娘の中じゃ負け組だって事に」
愕然として「え……」と固まる久麗亜。

○　瑞美の高校・演劇部の部室前の廊下（夕方）
西日の差し込む部室の前の廊下には曇り顔で『一幕入魂』の横断幕を手に持った瑞美と旺次郎とろめおがいる。
教師の宇都宮が荷物の無くなった部室のドアを勢いよく閉め、鍵をかける。
宇都宮「オイ、最後にこの落書き消しとけよ」
『祝廃部！　えんげキモ部！』と書かれた落書きを指さす宇都宮。
ろめお「消えないんすよ、どんだけ拭いても」
宇都宮「そりゃ落ちねーわ。これラッカー塗料だろ。専用のクリーナー買って来て落とせ」
瑞美「え、私達が買うんですか？」
宇都宮「他に誰がいる？　結局犯人見つけれなかったんだろが、文句言わずに早く消せッ！」
吐き捨てて立ち去って行く宇都宮。
ろめお「クソ、アイツ実は嫁が作った冷凍餃子手抜き呼ばわりしたからモメてんだぜッ！」
旺次郎「実は餃子のタレに酢入れるか入れないかでもモメてて離婚寸前なんだぜッ！」

悔しさの余り悪口が浮かばない瑞美。
旺次郎「え……瑞美、大丈夫……？」
涙目の瑞美はうなづくだけ。
ろめお「……どーするブチョミ？　って言っても計画練る場所も無くなったけど……」
瑞美「……うん……考えてる……考えて……」
手に持った横断幕を見つめる瑞美の目から悔し涙が溢れ出す。
旺次郎「瑞美……」
ろめお「クソ、あのガキ酷な条件出しやがって。てか一緒に探してくれればいーのによッ！」

○　創人の家・外観（夜）
明かりの灯る郊外の小さめの一軒家。

○　同・賢の部屋（夜）
本棚には賢が書いたスパイ小説が並んでいるが、端には若年性認知症の本。
その前にはベッドに腰かけて本棚を悲し気に見つめる賢がいる。
そこへエプロン姿の創人が料理を運んでくる。
賢「ありがとな……どうだった？　劇団は」
創人「え、メ、メチャ褒められたよ、僕の本」
賢「（嬉しそうに）そうか、どんな話だ？」
創人「……ら、来日した外国人力士がＣＩＡのスパイだったっていう話……」
賢「面白そうだな。お母さんもきっと喜ぶぞ」
本棚の隣にある棚に目を移す賢。
そこには戯曲賞の賞を取った創人の母の写真と花が飾られている。

○　商業施設・外観（夜）
商業施設の入った都内のビルの全景。

○　同・通路（夜）
洋服や雑貨を扱ったショップの向かい側のベンチに瑞美とろめおがいる。
ろめおは少し離れた自販機でジュースを買っている旺次郎を見ている。

ろめお「……ブチョミのせいだからな、久麗亜
に拒否られたの」
瑞美「何でよ。芸能人だからって言ってたし」
呆れ顔で溜息をつくろめお。
ろめお「いい加減ケリつけろ、オージ様争いの」
そこへ旺次郎が戻って来る。
旺次郎「……なに？　何の話」
瑞美「べ、別に。何でもないし……」
そこへ背後のエスカレーターから大
きなバッグを抱えた菊ヶ谷雄（ゆう）（１７）
とヤンチャそうな男子生徒Ａ（１７）
と男子生徒Ｂ（１７）の話声が聞こえ
てくる。
男子生徒Ａ「おい、あの店で財布パクって来い」
雄「え、で、でもあの店女性向けじゃ……？」
男子生徒Ｂ「いーんだよ、彼女にあげんだから」
雄「で、でも……」
雄の胸ぐらを掴んで睨む男子生徒Ａ。
男子生徒Ａ「行けんだろ、心は女子なんだから」
男子生徒Ｂ「ＳＮＳで拡散すっぞ、やらねーと」
怯えて渋々ながらもうなづく雄。
瑞美達は「聞いた？」と互いに見合う。
そこへ雄達が上がって来る。
瑞美「（小声で）……アレって、去年オージと
同じクラスだった子達じゃない？」
小さくうなづく旺次郎。
雄は男子生徒達から促されてためら
いながらもショップに向かい始める。
瑞美「（小声で）……ヤバくない？」
ろめお「（小声で）じゃあ助けてやれよ」
瑞美「（小声で）お願いします、ろめお先輩」
ろめお「（小声で）なんだよ、こんな時だけッ！」

○　創人の家・賢の部屋（夜）
まだ創人が母親の写真を眺めている。
賢「……そういえば部活はどうだ？　高校の」
創人「え、あ……やってないよ、通信だから」
賢「あ、そっか。悪い、すぐ忘れちゃうから」
創人「（微笑んで）ううん、大丈夫だよ」

賢「でも昔高校入ったらやるって言ってたな。
えっと……ん……何だっけ……？」
おもむろに鼻を掴んで考え始め、必死に思い出そうとする賢。
賢「……ん……あ、思い出した……演劇部だ。
絶対入って台本書くんだって言ってたな」
創人「え、は、早くご飯食べたら？　冷めるよ」
誤魔化し笑いで話を逸らす創人。

○　商業施設・通路（夜）
イラついた様子の男子生徒ＡとＢ。
男子生徒Ａ「クソ、あいつマジ遅くねーッ？」
男子生徒Ｂ「秒で済むだろフツーッ！」
瑞美達も心配気に見ているが雄は一向にショップから出て来ない。
瑞美「……どうしたんだろ？」
ろめお「見つかったんじゃね？　店員に」
しびれを切らした男子生徒ＡとＢがショップに入って行く。

○　同・ショップの店内（夜）
早足で雄を探す男子生徒ＡとＢだが雄はどこにも見当たらない。
店員達は談笑していて万引き犯を捕まえた雰囲気ではない。
男子生徒Ａ「ク、クソ、アイツどこ行ったッ！」
男子生徒Ｂ「オ、オイ、アソコじゃね？」
奥にある試着室を指さす男子生徒Ｂ。
試着室は扉は閉じているが靴は無い。
ニヤリと笑い合う男子生徒ＡとＢ。
次の瞬間、男子生徒Ａは試着室に駆け寄ってドアを開ける……が、中にいたのはコートを着たロングヘアでマスク姿の女性である。
男子生徒Ａ「（焦って）す、すいませんッ！」
慌ててその場を立ち去る男子生徒達。

○　同・通路（夜）
ショップから出て来て走り去って行く男子生徒ＡとＢを見送る瑞美達。

そこへ先程の女性も出て来て男子生
徒達と反対方向へ早足で歩き出すが
……持っているのは雄のバッグだ。
思わず立ち上がって後を追う旺次郎。
慌てて瑞美とろめおも後に続く。
気付いて振り返る女性……カツラに
マスクとメイク、女性物の服で変装し
ているが確かに雄である。
旺次郎「ゆ、雄……か？」
雄「え……お、旺次郎くん……な、なんで？」
旺次郎「……ゴメン……実はずっと見てて……
で、でも凄いなそのメイク。マジ女性じゃん」
雄「目元だけだから。マスク外したら全然だよ」
瑞美「メチャ上手いよ雄君。どこで覚えたの？」
雄「どこって……気付いたら覚えてた。初めて
の七五三は自分でメイクしてたし」
そこでろめおがハッと思いつく。
ろめお「な、なあ雄君、話聞いてくれねー？」

○　公園（夜）
ベンチに座って話す瑞美達と雄。
雄「……じゃあ、私のお願い聞いてくれる？
計画手伝う代わりに……だったらいいよ」
瑞美「え、な、なに？　お願いって……」
雄「……毎日一緒に帰って貰えない？　アイツ
等に絡まれる前に。同じ犯罪まがいな事でも
万引きより人助けのほうが全然マシだから」
旺次郎「な、なんだ、そんくらい全然いいよ」
ホッとして笑顔で見合う瑞美達。
雄「あと……くん付けで呼ばないでくれる？」
思わず「あ……」と顔を見合う瑞美達。
雄はベンチに残された紅白歌合戦の
記事のあるスポーツ新聞を見つめる。
雄「……何組なんだろね、私って……紅でも白
でも無いから……なら負け組か、人生の……」
旺次郎「……違う、何組でもない。雄は雄だ」
ろめお「そうだ。無理に色付けする必要ねーよ」
瑞美「そうだよ。それに一番綺麗だと思うし、
何色にも偏らずに澄み切った透明な人が」
雄「……え……あ、ありがとう……皆……」

思わず滲み出た嬉し涙を拭う雄。

○　瑞美の高校・廊下（夕方）
西日の差し込む廊下に教室から不安
気な表情の雄が出て来る……が、瑞美
と旺次郎とろめおが待っているのに
気付いた途端に笑顔になる。

○　同・階段（夕方）
楽し気に階段を下りる瑞美達。
ろめお「ブチョミどーする？　小道具係は」
瑞美「んー、プロ並みって言われてもねー」
旺次郎「無理だしな、小道具係の先輩じゃ……」
雄「ならＩＴ部はどう？　機械に詳しいでしょ」
ろめお「あ、その名前出しちゃいます？」
思わず「え？」と怪訝な顔の雄。
瑞美「絶対頭下げれないし、アイツ等には」
旺次郎「ずっと競い合ってたから、ヤツ等とは
部活カーストの最下層争いを」
雄「……そうなんだ。でも他に当てあるの？」
困り顔で見合う瑞美達。

○　同・ＩＴ教室（夕方）
ズラリとパソコンが並ぶ教室にＩＴ
部の部員達がいる。
そこへ後ろのドアが少しだけ開く。
隙間から顔を覗かせたのは瑞美達。
旺次郎「（小声で）悔しいけどしょうがないか」
ろめお「（小声で）でも相変わらずイケてねー」
瑞美「（小声で）早く探すよ、条件に合う奴」
瑞美達が教室の後方を見てみると
……ゲームをして遊ぶ部員達がいる。
瑞美達は「こりゃダメだ……」と首を
振って窓際に目を移すと……一人で
セクシー動画を見ている部員がいる。
ろめお「（小声で）わ、いーなー」
瑞美「（睨みながら小声で）サイテー」
教室の前方に目を移す瑞美達。
真剣な表情で自作のロボットを組み
立てる部長（男・１７）がいる。

思わず「アレだッ！」と見合う瑞美達。

○　同・ＩＴ教室前の廊下（夕方）

瑞美達の前にＩＴ部の部長がいる。

部長「……ハア？　何で俺が演劇部なんかに」

瑞美「どーしても必要なの、アンタの技術力が」

部長「てか、廃部になったんじゃねーの？」

旺次郎「まあ、自主公演っていうか……」

部長「何ソレ？　てかマジ有り得ねーんだけど、えんげキモ部入るなんて」

ろめお「な、なにッ！　こっちが廃部になったからってマウント取りやがってッ！」

部長に詰め寄るろめおを制す旺次郎。

部長「え……ソレが人にモノを頼む態度？」

瑞美「ゴメン。謝るからなんとかなんない？」

部長「……じゃあ……土下座するならいいよ」

瑞美「え……」

部長「……どうした？　早くしてよ、土下座」

顔を見合わせて悩む瑞美達。

そこへＩＴ教室から部員が不燃ゴミのゴミ箱を持って出て来る……が、そのゴミ箱にラッカー塗料のスプレー缶が入っているのに気付く瑞美。

瑞美「あ……そのスプレー。お、お前らかッ！うちらの部室のドアに落書きしたのッ！」

部長「ヤ、ヤベッ！」

教室に逃げ込み、ドアを閉める部長。

瑞美「クソ、クリーナー買って来て消せーッ！」

勢いよくドアを蹴りつける瑞美。

○　駅（夕方）

ムッとしたまま改札に向かう瑞美達。

瑞美「クッソーッ！　アイツら腹立つわーッ！」

旺次郎「でも無くなっちゃったな、当てが……」

雄「……ゴメンね、私が推したから」

ろめお「気にすんなって。ブチョミどーする？」

瑞美「知るか、もう今日は考えらんないッ！」

○　瑞美の最寄りの駅（日暮れ時）

瑞美が一人で改札から出て来る。

○　郊外の道（日暮れ時）
夕闇の迫る道沿いの空き地には一台の高級車が停まっていて、ドライバーがエンジンをかけたまま寝ている。
その反対車線側の歩道に瑞美がいる。
歩道の先にあるバス停のベンチには私服姿の次原灯（あかり）（１６）がいる。

瑞美「（気付いて）……アレ？　灯じゃん」
緊張気味の表情の灯は空き地の高級車を凝視しながら震える手で手元のノートＰＣを操作している。
ＰＣ画面には英語で『自動運転システムのハッキングに成功』という表示。

○　高級車の車内（日暮れ時）
突然、運転席のコントロールパネルの『ＡＵＴＯ　ＤＲＩＶＥ』の表示が点灯して車が動き出す。

○　バス停（日暮れ時）
灯がＰＣのフラットポイントを指でスクロールする。

○　高級車の車内（日暮れ時）
スクロールに連動して車のハンドルが動き、寝たままのドライバーを乗せてバス停の灯に向かって走り出す。

○　バス停（日暮れ時）
灯は急いでＰＣを傍にある用水路に投げ捨てるとその場で目を閉じる。

瑞美「（車に気付いて）灯ッ！　危ないッ！」
瑞美が灯に駆け寄って腕を引っ張ると間一髪、車は灯の横を通り過ぎる。

○　灯の家・外観（夜）
明りの灯る『次原電器店』の全景。

○　同・店の入口（夜）
うつむき加減の灯が帰って来る。
背後には心配気な表情の瑞美もいる。
瑞美「……灯、ホント怪我無くて良かったね」
灯は無言で会釈して店の奥へ向かう。
そこへ灯の母（４２）がやって来る。
灯の母「お帰り灯……え、み、瑞美ちゃん？」
瑞美「はい、お久しぶりです」
灯の母「どうしたの？　珍しいね」
瑞美「あ、たまたま灯と近くで会って……」
灯の母「そうなの。よく遊んで貰ってたもんね、小学校の頃は」
瑞美「懐かしいですね。じゃあ私はこれで……」
会釈をして帰ろうとする瑞美。
灯の母「……あ、瑞美ちゃんちょっと待って」
瑞美「え……何ですか？」
灯の母「あのさ、たまにでいいから昔みたいに会ってくれないかな？　灯と」
瑞美「え……はい、いいですけど……」
灯の母「本当？　良かった。実はあの子春に入った高校３日で行かなくなっちゃって……」
瑞美「え、そうなんですか？」
灯の母「うん。それ以来引き籠っちゃって……だからお願い、暇な時でいいから」
瑞美は「そうなんだ……」とうつむく。

○　同・灯の部屋（夜）
薄暗い部屋の奥にある機械の部品が散乱した机に灯が突っ伏している。
机の横には埃の被った瑞美とは別の高校の制服が入った紙袋がある。
そこへドアをノックする音。
灯は起き上がり、ドアを少し開ける。
ドアの前に立っていたのは瑞美だ。
瑞美「……少し話さない？　せっかくだし」
ためらいながらもドアを開ける灯。
部屋に入った瑞美は机の上にある傷だらけのＭＰ３プレーヤーに気付く。
瑞美「（手に取って）え……コレって……私が昔あげたヤツじゃん。灯まだ使ってんの？」

黙ったまま小さくうなづく灯。
瑞美「壊れてたのに灯直しちゃったんだよね。
買ったお店にだって修理断られたのに……」
懐かし気にプレーヤーを眺める瑞美。
瑞美「……てか灯、どこ行こうとしてたの？
バスに乗って」
灯「……天国です」
思わず「え……」と固まる瑞美。
灯「……なんで邪魔したんですか？
計画通り事故に見せかけて死ねたのに……」
瑞美「……え、あ、灯……何言ってんの……」
灯「……普通に自殺したら親は責任感じて自分
達責めるでしょ。でも事故なら逆に保険金残
せるから……悪者演じて貰ったんです、車に」
瑞美「え……じゃ、じゃあ、あの車って灯が？」
灯「はい……機械は人間より信頼出来ますから
……取説だって簡単だし、人間と違って……」
瑞美「で、でも、何で、何で自殺なんか……」
灯「……もう不可能なんです心の修理……なら
廃棄するしかないでしょ、ジャンク品はッ！」
顔を手で覆い、その場にうずくまる灯。
瑞美「は、廃棄って……だ、大丈夫だよ灯は」
灯「何がッ？　機械が好きって言っただけで陰
キャのオタク呼ばわりされて、結果私だけグ
ループライン招待されなくて、入学して秒で
確定ですよ、ＪＫ生活は負け組だってッ！」
涙声で叫び、溢れ出る涙を拭う灯。
瑞美は咽び泣く灯を暫く見つめると
ゆっくり身を屈め、手に持ったＭＰ３
プレーヤーを灯に見せる。
瑞美「何言ってんの？　灯はジャンク品なんか
じゃないッ！　こんなに古いモノ直せる凄
い技術と、長く使い続けられる機械には無い
温かくて優しい心持ってんじゃんッ！」
灯「（顔を上げて）……み、瑞美ちゃん……」
瑞美「今まで出会えなかっただけだって、灯の
技術認めてくれる人と。だから大丈夫ッ！
私が絶対させないからジャンク品になんて、
廃棄なんてッ！　負け組になんてッ！」

○　同・ダイニング（夜）
灯の母が夕食の支度をしている。
そこへ灯と瑞美が顔を出す。
灯「……お母さん、お願いがあるんだけど」
灯の母「え……お願い？　なに？」
灯「借りてもいい？　隣の使ってない倉庫」
灯の母「え、いいと思うけど……何で？」
灯「演劇部始めるから、瑞美ちゃん達と」
灯の母「（驚いて）え……ホ、ホントに？」
瑞美「はい。実は皆で集まる場所探してて」
灯の母「そう、じゃあお父さんに頼んどくね」
瑞美「ホント？　ありがとうございますッ！」
灯の母「こっちこそありがとね、瑞美ちゃん」
灯「……ありがと、お母さん（初めて微笑む）」
微笑み返す灯の母の目は潤んでいる。

○　瑞美の高校・校門（朝）
眩い朝日の光が迷惑そうにうつむき
加減で登校してくる久麗亜。
そこへ校門の陰から旺次郎が現れる。

○　同・中庭（朝）
旺次郎と久麗亜が二人で話している。
旺次郎「……辞めたんだって？　パパの事務所」
久麗亜「……怒ってた？　社長」
旺次郎「いや、逆にやりたくない仕事押し付け
て申し訳無かった。って伝えてくれって……
てか、やらない？　この間の話」
久麗亜「え、まだやろうとしてんの？」
旺次郎「うん、出来るだろ？　仕事辞めたなら」
久麗亜「え……辞めたは辞めたけど、でも……」
旺次郎「やろうよ。演技の練習にもなるし……
で、将来韓国に行ってみるとか、俺みたいに
……（韓国語で）お互い頑張ろ、それぞれ」
久麗亜は一緒に行こう的な言葉と勘
違いして「え……」と顔を赤らめる。
久麗亜「しょ、しょうがないな……やるよ」
旺次郎「え、いいのッ？　マジでッ？」
久麗亜「うん……あ、でもガチでヤバかったら
途中でやめるかもだけど」

○　同・廊下（朝）
少しだけ開いた窓から瑞美とろめお
が旺次郎と久麗亜を覗き見ている。
ろめお「……お、やった。ＯＫな感じじゃね？」
瑞美「（複雑そうな顔で）……だね」

○　次原電器店・外観（夕方）
店の隣には古びた倉庫がある。

○　同・倉庫（夕方）
瑞美に旺次郎、ろめお、久麗亜、雄、
灯が初めて顔を揃えている。
机の上の灯のノートＰＣの画面には
リモートで参加している創人の顔。
瑞美「どう？　条件揃えたけど、山科センセー」
創人「……まさか全部揃うとは……でも嫌です」
ろめお「な、なにッ！　お前いい加減に……」
創人「（慌てて遮る）ち、違いますッ！　共犯
者扱いは嫌なんで、僕は過去の作品を盗用
されただけ、って事にして貰えるなら……」
瑞美「あ……なるほど。じゃあ……いいの？」
創人「まあ……約束しちゃいましたからね……」
ろめお「っしゃ、なら頼むぞセンセー」
瑞美「じゃあ、写真撮らない？　我が演劇部の」
旺次郎「いーね。撮ろうよ皆で」
ろめお「ならカーテンコールっぽく撮らねー？」
雄「え、何それ？」
久麗亜「知らない？　舞台上で並んで手繋ぐの」
灯「あー、何か見た事ありますね」
瑞美「てことは欲しいよね、舞台……」
周囲を見回す瑞美。倉庫の端には数本
の小さめの脚立がある。
瑞美「あ……灯、あの脚立借りていい？」
灯「え、高さも色もバラバラだけど……」
ろめお「いーじゃん、俺ららしくて」
早速脚立を運び出すろめお。創人の映
ったノートＰＣを持った瑞美も続く。
灯は机にスマホをセットする。
一人一脚づつ脚立を並べて上る一同。

瑞美「あ、待って。端の人コレ持ってくれる？」
『一幕入魂』の横断幕を広げる瑞美。
瑞美「じゃあ……皆、手繋ごっか」
手を繋ぎ、不揃いの脚立の上で笑顔で
カーテンコールをキメる一同。
灯「じゃあ、１０秒後に撮りますね」
灯はタイマーをセットし、端の脚立に
上って横断幕を持ち、笑顔で手も繋ぐ。
倉庫内に明るいシャッター音が響く。

○　警察署・刑事課（夕方）
刑事の橘の元へ刑事Ａがやって来る。
刑事Ａ「橘さん情報来ました、大阪府警から」
橘「なに？　大阪？」
刑事Ａ「はい。これが偽造した書類だそうです」
偽の補助金の申請書を見せる刑事Ａ。
そこへ刑事Ｂが駆け込んで来る。
刑事Ｂ「じょ、情報追加入りましたッ！　宮城
に新潟、愛知と広島に福岡と沖縄からもッ！」

○　倉庫（夕方）
脚立を片づけ終える一同。
創人は自分のノートＰＣの台本用の
ページに瑞美達の名前を打ち込む。
ろめお「センセー、台本出来たら製本して」
創人「絶対嫌です。証拠残したくないんで」
『演劇部第一回公演』と打ち込む創人。
瑞美「（呆れ顔で）マジでバカなの？　タメオ」
久麗亜「（笑って）タメオは草。マジウケる」
ろめお「タ、タメオ言うなブチョミッ！」
瑞美「な、ならブチョミ言うなッ！」
創人「あの、ブチョミさん」
瑞美「って言うんかいッ！」
笑う一同。ムッとする瑞美だが雄と灯
も笑顔なのに気付いて表情を緩める。
瑞美「ま、いいけど……てかなに？　センセー」
創人「どうします？　この演劇部の名前って。
例えば……劇団っぽく○○組みたいな」
瑞美「○○組か……（少し考えて）……駄目だ、
ギョーザのせいで負け組しか浮かばない」

他のメンバーも曇り顔でうなづく。
試しに『負け組』と打ち込む創人。
創人「……なんか失敗しそうですね（苦笑い）」
旺次郎「違うのにしない？　縁起悪いし」
創人「（急に閃いて）あ、じゃあこうして……」
『負け組』の上に『脱』を加える創人。
創人「……どうです？　『脱負け組』ってのは」
途端に一同の表情が笑顔に変わる。
瑞美「い、いいじゃんソレッ！」
旺次郎「全然変わるな、一文字足すだけで」
ろめお「それな。俺も実は水餃子は好きだぜ」
雄はリモート画面の創人に向かって
身を乗り出す。
雄「私の雄（おす）の字片仮名のユウにしてくれる？」
創人「はい、了解です」
満足気に微笑む雄。皆も笑顔で見合う。
瑞美「じゃあセンセー、まずどーすればいい？」
創人「では……劇場に行って防犯カメラの映像
を見せて貰いましょう。悪役が出て来ないと
始まりませんからね、どんな物語も」
瑞美「あ、でも……支配人には内緒にしたいの、
絶対反対するだろうから」
創人「ですね……（父親同様鼻を掴んで考える）
……じゃあ雄さん、早速腕前見せて下さい。
誰か変装させて貰えますか？　刑事に」
雄「え、け、刑事……？」
旺次郎「でも、この間来てたよ刑事さん」
ろめお「データコピーして持ってったからな。
ムリあんだろ、もう一回来ましたってのは」
創人「んーそっか……（また鼻を掴んで考える）
……てかそれってどこの刑事でしたか？」
ろめお「え、確か一番近くの警察署の人のハズ」
創人「……なら灯ちゃん、小型のマイクと……
警察手帳と名刺作れますか？　警察庁の」
灯「え……み、見本があれば……（自信無さ気）」
瑞美「頑張れ灯。てかセンセー、何で警察庁？」
創人「別の警察組織の刑事に成り切るんです。
警察庁ってのは国の機関で、前に来たのは
東京の警視庁の所轄の刑事だと思うんで」

思わず「ほおー……」と感心する一同。
創人「では、誰に演じて貰うかですが……」
真っ先に手を上げる瑞美だが創人の
目線は久麗亜に向く。
創人「……お願い出来ますか？　久麗亜さん」
久麗亜「え、わ、私……？」
創人「失敗したくないんで、オープニングで」
思わずフン、とそっぽを向く瑞美。
久麗亜は悩みながらもうなづく。
創人「では、もう一人男性で……」
ニヤけ顔のろめおが手を上げる。
久麗亜「タメオじゃ嫌。オージやって」
創人「ですね。エリート刑事感有るし」
思わずムッとするろめお。瑞美は笑う。
久麗亜「ねえ、オージお願い」
旺次郎「う、うん、分かった……」
創人「では衣装もお願いしますね、オージさん」
旺次郎「うん、了解」
創人「……じゃあ始めましょうか、第1幕を」
緊張気味の表情でうなづく一同。

○　芸能事務所・外観（夜）
明りの消えたビルの全景。

○　同・衣装部屋（夜）
暗がりの中、旺次郎の誘導でスーツや
革靴等を運び出す瑞美とろめおと雄。

○　倉庫（夕方）
西日が差し込む倉庫で灯がネットで
検索した画像を見ながら警察手帳と
名刺を作っている。
×　　×　　×
見事な雄のメイクによってアラサー
の刑事に変装する旺次郎と久麗亜。
×　　×　　×
灯がネクタイピン型の小型マイクを
完成させる。
それを雄が旺次郎と久麗亜に着ける。

○　小劇場・入口（夕方）
　　曇り顔で閉鎖作業中の支配人がいる。
　　そこへ現れたのは……見事刑事に変
　　装したマスク姿の旺次郎と久麗亜だ。

○　倉庫（夕方）
　　リモート参加の創人を含む瑞美達が
　　灯のノートＰＣから聞こえる久麗亜
　　達のマイクの音声に耳を傾けている。

○　小劇場・入口（夕方）
　　『警察庁　特殊詐欺対策班』と書かれ
　　た名刺を久麗亜から受け取る支配人。
久麗亜「（声のトーンを落として）……あの、
　防犯カメラの映像お借りしたいのですが」
支配人「え、前に見せたと思うんやけど……」
久麗亜「アレは所轄の者でして。我々が掴ん
　だ情報では全国的な組織の可能性が……」

○　倉庫（夕方）
ろめお「やっぱ上手いな、クレア様は」
　　うなづく一同だが瑞美だけは不満気。

○　小劇場・入口（夕方）
　　名刺を見て顔を曇らせる支配人。
支配人「でも……あんたらホンマに刑事か？
　俺はもう信用出来へんのや名刺なんかッ！
　話なら一緒に行って聞くわ、警察庁にッ！」

○　倉庫（夕方）
瑞美「ヤバッ、疑われてる……」
　　不安気な表情で顔を見合わせる一同。

○　小劇場・入口（夕方）
　　支配人は名刺を久麗亜に突き返す。
旺次郎「（焦って）……ちょ、ちょっと、失礼
　じゃないですかッ！　わ、我々は本物の……」
　　詰め寄る旺次郎を手で制する久麗亜。
久麗亜「勿論です。ご一緒して頂けますか？」
支配人「よ、よし、ほな行こか」

驚く旺次郎を尻目に久麗亜はおもむ
ろにうつむき、嗚咽をこらえ始める。
支配人「(驚いて)……ど、どないした……？」
久麗亜は見事に大粒の涙を流す。
久麗亜「……す、すいません。つい自分が情け
なくなってしまって……自業自得ですよね、
疑われるのは。我々が詐欺師を野放しにして
しまっている結果がコレな訳ですから……」
涙を拭い、顔を上げる久麗亜。
久麗亜「……ですが、必ず、必ず犯人を捕まえ
て奪われたお金は取り戻しますので。どうか
今一度我々の事を信じて任せては頂けませ
んでしょうかッ？　お願い致しますッ！」
頭を目一杯深く下げる久麗亜の目か
らまた大粒の涙が地面に落ちる。
慌てて旺次郎も頭を下げる。
硬い表情で二人の様子を見つめてい
た支配人の表情が徐々に緩んでいく。
支配人「……頭上げてくれるか、刑事さん……
簡単に騙された俺も悪いんやから……」

○　倉庫（夕方）
「お～」と声を上げて拍手する一同。
瑞美も顔は悔し気だが拍手をする。

○　次原電器店・前の道（夜）
旺次郎と久麗亜が戻って来る。

○　倉庫（夜）
笑顔でドアから入って来た旺次郎の
手にはＵＳＢメモリ。
ろめお「やったなーッ！　流石クレア様ッ！」
久麗亜「まーね。違うから、無能の素人とは」
瑞美をチラ見してニヤける久麗亜。
瑞美はムッとして睨み返す。
旺次郎「じゃあ見てみる？　犯人を」
旺次郎がＵＳＢメモリを差し込むと
灯のノートＰＣを覗き見る一同。
画面には支配人と話す職員Ａ達の姿。
ろめお「……これは公務員だな、どー見ても」

旺次郎「っすね。演技力で勝てる自信無いかも」
瑞美「絶対勝てるって、演劇部魂があればッ！」
久麗亜「（鼻で笑う）熱いね、相変わらず」
瑞美「（睨んで）ハアッ、なにソレッ？」
ろめお「ねー、今揉める必要ある？　二人共」
　　フンッ、と顔を逸らす瑞美と久麗亜。
創人「……あの、冬休みっていつからですか？」
旺次郎「え、来週からだけど」
創人「出来れば休み中に計画完了したいですね。
　敵は放課後に合わせて動いてくれないんで」
ろめお「そっか、確かにそーだな……」
雄「じゃあ早く見つけないとね、この詐欺師」
灯「でも、どーやってですか？」
瑞美「やっぱ古い建物じゃない？　現れるのは」
創人「その可能性は高いですね……では、明日
　から二人一組で探し出しましょう、犯人を」
ろめお「え、てことは一人余らねー？」
瑞美「お父さんの介護あるんだって、センセー」
　　思わず「エッ！」と驚く一同。
創人「すいませんいつもリモートで……でも、
　受けた仕事は絶対途中で投げ出しませんよ、
　それがプロの条件の一つですから」

○　商店街（夕方）
　　クリスマス商戦で活気のある商店街。
　　書店からカバーを付けた買ったばか
　　りの本を持った久麗亜が出て来る。
　　外には女性のメイクをしたマスク姿
　　の雄が待っている。
久麗亜「ゴメン……じゃあ探そっか、偽公務員」
雄「うん……って何の本買ったの？　久麗亜」
久麗亜「ちょっとね……てか今は必要無くね？
　その変装」
雄「変装じゃないよ、これが自然なの」
久麗亜「そっか、ゴメン……」
　　微笑みながら首を振る雄。
久麗亜「でもメイク上手いね。プロ目指せば？
　知り合いのメイクさん紹介してあげよっか」
雄「え……ホ、ホントに？」
久麗亜「うん。勿体無いよ、才能あるのに」

雄「でも……私ちょっと人と違うから……」
久麗亜「大丈夫、人と違う事が必要な世界だし。
同じ制服着せて、同じルールで縛って、同じ
教科書使ってんのにそれで多様性を教えら
れると思ってる勘違いクソ高校と違ってさ」
思わず微笑む雄の目に嬉し涙が滲む。

○　創人の家・キッチン（夜）
創人が夕食を作っている。
そこへグループメールが入る。
久麗亜からで『ダメだった……』。
溜息交じりに返信する創人。
『明日から冬休みですね！　皆さん頑
張って！』というメッセージ。

○　住宅街の道
数日が経ち、民家の住人が庭木からク
リスマスの飾りを外している。
ろめおとＭＰ３プレーヤーをイヤホ
ンで聴きながら歩く灯がいる。
灯「……いませんねー、詐欺師のヒト達」
ろめお「てかなに聴いてんの？　灯ちゃん」
灯「山下達郎サンの『ずっと一緒さ』です」
ろめお「え、し、渋過ぎね？」
灯「ドラマの主題歌で、昔瑞美ちゃんと夕方に
再放送見てて……あ、ここ今一番エモい歌詞」
か細い声ながらも歌いだす灯。
灯「……いくつもの悲しみを……くぐり抜けた
そのあとで……つないだ手の温かさが……
全てを知っている……」
歌い終えてスマホを見て微笑む灯。
待ち受け画面は脱負け組の皆と手を
繋いで撮ったカーテンコールの画像。
灯「……てかダブってんですよね、タメオさん」
ろめお「（ムッとして）ろめお、な」
灯「……よく、よく生きてられますね」
ろめお「ハ、何だよソレ？」
灯「絶対修理不可じゃないですか、そんな経歴」
ろめお「だからいーんじゃん、ジャンク品は」
灯「え……？」

ろめお「壊れたら壊れたでその方がいーんだよ、
トークのネタにさえ使えれば。俺の夢は芸人
だから留年も死ぬどころかオイしいって」
灯「……ひ、引いちゃいますね、前向き過ぎて」
ろめお「死ぬなんて考えねーって夢があれば」
灯「夢か……私の取説に無い言葉使われても」
ろめお「じゃあ、今思う？　死にたいって」
灯「え、い、いや……楽しいんで、演劇部」
ろめお「だろ？　実は持ってるからだよ、夢を」
灯「え、だから無いですよ。もう長い事人生の
設計図アップデートした記憶無いんで……」
ろめお「あんだろ、皆で1千万円取り返す夢」
思わず「あ……」と立ち止まる灯。
ろめお「難しく機械的に考え過ぎなくていーの。
夢っていつの間にか見ちゃってるもんだろ、
眠ってる時と同じでさ」
微笑むろめおを見て灯の表情も緩む。

○　創人の家・リビング（夜）
創人が洗濯物を畳んでいる。
そこへまたグループメールが入る。
ろめおからで『今日も×』。
思わず溜息をつく創人。
そこへ瑞美と久麗亜からもメッセー
ジが入る。『こっちも』『同じく』。
思わずガックリと肩を落とす創人。

○　繁華街
数日が経ち、高級ブランド店の店員が
店頭で正月の飾り付けをしている。
そこへ瑞美と旺次郎が通りかかる。
瑞美「……もう半分終わっちゃうね、冬休み」
旺次郎「いないな犯人。結構探したけど……」
そこで瑞美が反対車線側の歩道に旺
次郎の父がいることに気付く。
瑞美「あ……オージ、あれパパじゃない？」
高級そうなコートに身を包んだ旺次
郎の父が女性と仲良さ気に寄り添い
ながら高級韓国料理店に入って行く。
旺次郎「でもママじゃないけど、一緒にいるの」

瑞美「え、そ、そうなの？」
旺次郎「……ずっと前からみたい、不倫」
瑞美「……そうなんだ」
旺次郎「よくやるよこのご時世に。てか欲望沼って子供はお金も人生経験も無いから一度ハマると抜け出せないとか言うけど大人の方が変に金も人生経験もある分抜け出せなくね？　って思うけど。現に出来てねーし」
瑞美「そ、そうかもね……」
旺次郎「それに不倫がバレたら結局一緒じゃん、事務所に迷惑かけるのは。俺達がしてる事がバレたとしても」
瑞美「え、じゃあオージが脱負け組に参加したのって反抗心なの？　パパへの」
旺次郎「え、ん、まあ……そんなとこかな」
瑞美「そっか。てかさ……オージって久麗亜と一緒に行くの？　韓国に」
旺次郎「え、何ソレ？」
瑞美「言ってなかった？　この間韓国語で」
旺次郎「（笑って）あーアレ？　違うよ。一緒に行こうって意味じゃないし」
思わずホッとして笑みを浮かべるもすぐに真顔に戻る瑞美。
瑞美「……でも、行くには行くんだよね？」
旺次郎「まーね。ハリウッドへの近道でしょ」
瑞美「……そっか。やっぱオージは色々違うな、私とは住む世界が……」
旺次郎「な、何だよソレ。別に違わないだろ」
曇り顔で首を振り、顔を背けた瑞美の目線の先にある古い建物から一人の男性が出て来る……支配人を騙した職員Ａである。
驚いて咄嗟に建物の陰に隠れる瑞美。
旺次郎「ど、どうした瑞美？」
瑞美「（小声で）い、いたッ！　犯人ッ！」
旺次郎「（気付いて小声で）あ、ホントだッ！」
旺次郎も瑞美の背後に隠れる。
瑞美「……つ、つけるよ、アイツの後を……」
旺次郎「え、センセーの指示待った方が……」
瑞美「もう見つかんないって、今見失ったら」

引き締まった表情で職員Ａの後姿を
追い始める瑞美。旺次郎も続く。

○　公園

職員Ａがトイレの裏側へ向かう。
その後をつける瑞美と旺次郎。
トイレの裏には若者が待っている。
咄嗟に木陰に身を隠す瑞美と旺次郎。
職員Ａは若者にぶ厚い封筒を渡す。
旺次郎「（小声で）……アレ金かな？」
瑞美「（小声で）だね。部下に運ばせるんだよ」
旺次郎「（小声で）じゃあボスか、アイツが」
瑞美「（小声で）絶対取り返すからね、１千万」
話し終わりに若者に殴られる職員Ａ。
思わず「エッ！」と驚く瑞美と旺次郎。
職員Ａは若者に何度も頭を下げる。

○　倉庫

曇り顔の脱負け組一同がいる。
ろめお「……只の下っ端だったか、アイツは」
力無くうなづく瑞美。
創人「で、でも、現金の受け渡し場所は分かり
ましたから張り込んで後をつけましょう」
瑞美「しょうがなくない？　アイツ追っても」
創人「いや今から追うのは人じゃなくて金です。
僕らの目的は犯人を捕まえることじゃない、
早く１千万円を取り返すことですからッ！」
思わず「あ……」と見合う瑞美達。

○　公園

久麗亜と雄が木陰に身を潜めている。
昨日の若者がまた封筒を受け取り、
バッグに入れてトイレから離れる。
すかさず後をつける久麗亜と雄。

○　バス停

到着したバスに乗り込む若者。
それを見届けた久麗亜と雄が離れる。
そこへ代わりに現れたろめおと灯が
バスに乗り込む。

○　バスの車内

バスがバス停の前で停車すると若者はバッグを置いたまま席を立つ。
ろめおも席を立つがバッグが席にあることに気付いた灯がろめおを制す。
そこへ乗車してきた女性が素早くバッグが置かれた席に座る。
女性を注意深く監視するろめおと灯。

○　バス停

女性はバッグを持ってバスから降り、近くのカフェに向かって歩く。
ろめおと灯も少し離れて降りる。

○　カフェ

席に着き、バッグを床に置く女性。
そこへ瑞美と旺次郎がやって来て、ろめおと灯はその場から離れる。
女性の背後に座っていた中年男性が電話が掛かってきたふりをして席を立つと同時にバッグも持って行く。
すかさず後をつける瑞美と旺次郎。

○　オフィス街

ビルの非常階段を上る中年男性を瑞美と旺次郎が建物の陰から見ている。
３階の非常口から中に入る中年男性。
ビルの表側へ回り、見上げる瑞美達。
３階には『カウダ・ソリューションズ Co.,Ltd』の真新しい看板がある。

○　警察署・刑事課

ＰＣの前に橘と刑事ＡとＢがいる。
画面はカウダ・ソリューションズのＨＰでＣＥＯ紹介の欄には爽やかな笑顔の額御影（ぬかみかげ）元也（３８）の画像。

刑事Ａ「額御影元也、表向きは環境コンサルティングベンチャーのＣＥＯです。東京では」

橘「大阪では介護施設、宮城では貧困家庭支援
のＮＰＯ法人……見事な偽善者ぶりだな」
刑事Ｂ「はい。それに赤トカゲという異名が」
橘「なに、赤トカゲ……？」
刑事Ｂ「詐欺が発覚すると尻尾切りの様に部下
に会社を任せて自分は逃げるからだと……」

○　次原電器店・裏庭
旺次郎と雄がゴミ出しをしている。
旺次郎「……なんか段々緊張感増して来たな」
雄「だね。てかブチョミちゃんから聞いたけど
親への反抗心なんだって？　参加した理由」
旺次郎「え、いや、アレはその場の思い付き」
雄「え、そうなの？」
旺次郎「うん。マジな理由はここだけの話……
守ってあげたいじゃん、大切な人は」
雄「あ、やっぱそうなんだ……」
旺次郎「でも向こうは住む世界が違うとかって
全然俺の事受け入れる気無さそうでさ……
だから俺も負け組なんだよね、恋愛の……」
背後にある倉庫の陰に人影が……
悔し気にうつむく久麗亜である。

○　倉庫
灯のＰＣを覗き込む脱負け組一同。
様々なＳＮＳから集めた額御影の画
像が何枚も表示されている。
瑞美「……ボスか、コイツが」
旺次郎「なんだ、メチャ爽やかじゃん」
灯「ぬかみかげ、ってのが苗字みたいですけど
裏サイトじゃ赤トカゲって呼ばれてますね」
ろめお「マジか、メチャグロくね」
瑞美「そのほうが手元に有りそうじゃん、お金」
久麗亜「でもガチ反社ぽくね。もうやめない？」
瑞美「え、何で？　ここからが本公演じゃん」
久麗亜「下手したら死ぬよ、トカゲに食われて」
途端に一同の間に緊張が走る。
瑞美「だ、大丈夫だって、演劇部魂があれば」
久麗亜「（鼻で笑う）でた、バカの一つ覚え」
瑞美「ハッ？　なにアンタいつもいつも……」

久麗亜「(遮って)もうムリ、私降りるからッ！」
ろめお「え、う、嘘だろッ？」
久麗亜「前に言ったしヤバかったらやめるって」
旺次郎「た、確かに言ってたけど……」
創人「でも絶対失敗しますよ、プロがいないと」
久麗亜「勝手に失敗すれば？　素人芝居でッ！」
瑞美「じゃあ見捨てる気？　支配人の事ッ！」
久麗亜「知るか、あんなクソ劇場なんかッ！」
ろめお「なにッ！　なんだよクソ劇場ってッ！」
　険しい顔で久麗亜に詰め寄るろめお
　を慌てて抑える旺次郎。
旺次郎「ま、待てよ久麗亜。演技の練習……」
久麗亜「(遮る)元々行く気無かったし韓国と
　かッ！　安心して人には言わないからッ！」
　吐き捨てて出て行ってしまう久麗亜。
　動揺した表情で見合う一同。
　雄は机の上に久麗亜が忘れていった
　カバーの付いた本があるのに気付く。
　本を取り、開くと中身は韓国語講座。
　そっと本を閉じて自分の鞄に隠す雄。
創人「……確かに危険には違いないですが……
　どうします？　他の皆さんは」
　悩む一同だが灯はすぐに口を開く。
灯「私はずっと付いてく、瑞美ちゃんに」
瑞美「あ、灯……」
雄「私も。危険なのは虐める奴らと一緒だし」
　旺次郎とろめおもうなづく。
瑞美「あ、ありがとう、皆……」
雄「でも大丈夫かな？　プロの役者いなくて」
ろめお「探す時間無くね？　冬休み終わるし」
瑞美「そうだよ。それにこういう時に団結力が
　試されるんでしょ。だってシェイクスピアの
　セリフにもあるじゃん、『逆境が人に与える
　教訓ほどうるわしいものはない』って」
創人「ですね。６人でやるしかないでしょう
　……皆さんいいですね？　公演継続で」
　不安気な表情ながらもうなづく一同。

○　創人の家・外観（夜）
　明りの灯る郊外の一軒家の全景。

○　同・創人の部屋（夜）
悩まし気な表情の創人がＰＣ画面に
表示された額御影の画像を見ながら
鼻を掴んで考えているが、暫く考える
もあくびをして、居眠りをし始める。
そこへ父親の賢が入って来る。
創人「(目を覚ます) お、お父さん、なにッ？」
賢「なにって……何でいるんだ？　俺の部屋に」
創人「え、こ、ここ僕の部屋だよ……」
賢「なに？　俺の部屋だろ」
創人「ち、違うって……」
賢「え、そうか……？　ん？　コレって……」
額御影の画像を見て眉を顰める賢。
賢「……何だっけ……昔小説に書いた……（鼻
を掴んで思い出そうとする）……そう、スイ
スの高級腕時計だ。この人の趣味なんだな」
思わず「え？」と画像を見る創人。
確かに額御影の腕にはどの画像も高
級そうな腕時計がある。
ハッと閃き、すぐにＰＣに向かう創人。

○　倉庫
翌日の午前の日差しが差し込む倉庫。
灯のＰＣを覗き込む瑞美達の前には
リモート画面でドヤ顔の創人がいる。
瑞美「……え、偽物の高級腕時計作って額御影
に１千万円で買わせるってッ？」
ドヤ顔のままうなづく創人。
旺次郎「マジか……無いわ俺らにその発想」
ろめお「でも出すか？　腕時計に１千万円も」
創人「はい必ず。アイツのコレクションはほぼ
１千万円越えですから」
灯「でも作ってもバレると思うよ、マニアなら」
創人「心配無用。現存しない物を作ればいい。
トカゲが食いつきそうな未発売のレア物を」
雄「そっか……なるほどね」
瑞美「でも食いつく？　この世に無い物に」
創人「大丈夫です。額御影の画像見て下さい。
赤多くないですか？　コイツの服」

慌てて額御影の画像を見る一同。
確かに額御影が身に着けている服や
アクセサリー類は赤が多い。
瑞美「ホントだ。だから赤トカゲか……」
創人「皆さんだって欲しくないですか？　好き
なモノ同士がコラボしてて、まるで自分の為
に存在してんじゃないかってモノがあれば」
旺次郎「まあ、確かに欲しいかも」
灯「じゃあ、赤い腕時計作ればいいって事？」
創人「いや、それだけじゃレア度が少な過ぎる。
『腕時計　赤』で検索してみて」
灯がＰＣで検索すると……数多くの
赤い腕時計の画像一覧が表示される。
雄「うわ、結構有るねー」
創人「でしょ。いくらトカゲだって針と糸だけ
では釣れません、餌を付けないと……でも、
ＳＮＳには餌的な物はもう無さそうでした
ので別の方法で探さないと、トカゲの好物を」
瑞美「なら本人に聞くのが一番確実じゃない？
私コイツの会社に行ってみる、変装して」
思わず「エッ？」と驚く一同。
創人「……良いかも。ついでに盗聴器も仕掛け
れるし。やってみましょうかブチョミさん」
気合の入った表情でうなづく瑞美。
瑞美「……じゃあ、公演再開するよ、第２幕の」
×　×　×
灯が観葉植物のサンセベリアの鉢の
底に盗聴器を取り付けている。
隣には経済雑誌を見て勉強中の瑞美。
瑞美「あ……ソレ今見てるページに載ってる。
空気清浄効果のあるエコプラントだよね」
灯「最高の贈り物でしょ、環境保全企業には」
そこへ旺次郎と雄が瑞美の衣装に使
う女性記者風のスーツを運んで来る。
創人「（気付く）雄さん指にもメイクお願いし
ます。指紋が家具とかに付くのを防ぐ為に」
雄「あ……なるほどね、了解」
続いて創人は何故かスマホを操作し
て雄宛てに『もう一つお願いが……』
という文章を打ち出す。

○　額御影の会社・外観
　翌日の午前の日差しが当たるビル。
○　同・ＣＥＯ室
　赤系の服姿で仕事中の額御影がいる。
　そこへ女性の常務（４４）が顔を出す。
常務「失礼致しますＣＥＯ。お話ししていた経済情報サイトの記者様がご到着されました」
　変装してサンセベリアの鉢植えを手にしたマスク姿の瑞美が現れる。
瑞美「（微笑む）初めまして、額御影ＣＥＯ」
○　倉庫
　緊張気味にマイクの音を聞く一同。
○　額御影の会社・ＣＥＯ室
　棚の上に置かれたサンセベリアの鉢。
　ソファーに座って話す瑞美と額御影。
瑞美「……なるほど、ＣＥＯ自らＳＤＧｓにも積極的に取り組んでいっている、と……」
額御影「当然です。社会貢献企業ですので」
瑞美「では、次は額御影ＣＥＯのプライベートについて伺いたいのですが……」
○　倉庫
　思わず息を飲む一同。
ろめお「キ、キタッ！　頼むぞブチョミッ！」
○　額御影の会社・ＣＥＯ室
　瑞美に爽やかに微笑む額御影。
額御影「そうですか……出来ればプライベートの質問はＮＧでお願いしたいのですが……」
瑞美「え……でも読者はきっと知りたい……」
額御影「（遮って）申し訳ありません、勝手で」
瑞美「な、何か理由が？　秘密にするのは……」
額御影「まあ、今は何でもない情報が悪意を持って伝えられる事もありますから。会社を守る為には必要なんです、秘密主義者を演じるのも。それが頭の良い人間の生き方かと……」

瑞美「そ、それはそうかもですけど、でも……」
額御影「(遮る) シェイクスピアのセリフにもあるでしょう、『この世は舞台、人はみな役者だ』って……」
驚いて思わず「え……」と固まる瑞美。
額御影「……どうしました？」
瑞美「い、いえ、ちょっと驚いて……お詳しいんですね。私はそういうの疎いので……」
額御影「昔ちょっとカジってたので……まあ、これだけで勘弁して頂けませんか？　私のプライベートの情報は」
額御影は笑顔だが目が笑っていないのに気付いて思わずビビる瑞美。
瑞美「は、はい、分かりました……」

○　倉庫
ガッカリと肩を落とす一同。
ろめお「クソ、やっぱポンコツ部長だなッ！」
創人「いえ、額御影のガードが固いだけです。やはり裏社会の人間ですね……」

○　額御影の会社・ビルのエントランス
肩を落とした瑞美が出て来る。
道の向かい側の路肩に停まった車には様子を伺う刑事の橘達がいる。
瑞美「(気付く)アレ？　この間の刑事……？」

○　同・ＣＥＯ室
笑顔の額御影の前には先程の常務。
額御影「……常務ですか？　取材了承したの」
常務「はい。新しい会社なのでアピールの為に」
満面の笑みでうなづく額御影。
額御影「……クビだ、今すぐ消えろ」

○　倉庫
灯が既製品の腕時計をバラしている。
そこへ曇り顔の瑞美が戻って来る。
瑞美「……ゴメン、何も聞き出せなかった」
創人「いえ、盗聴器仕掛けられただけで大収穫ですよブチョミさん」

灯のメインＰＣとは別のノートＰＣ
からはＣＥＯ室の音が聞こえている。
瑞美「あと、会社の前に刑事さんがいて……」
ろめお「マジッ？　トカゲ捕まえて貰おーぜ」
創人「でも取り戻せないかもですけど、１千万」
ろめお「あ、そ、そっか……」
瑞美「どーしよ、早くしないと……」
創人「オージさんに期待しましょう、餌の件は」
瑞美「（驚いて）え、オージって……？」

○　額御影の会社・ビルの裏口
３階の非常口から男性の部下Ａ（３６）
と部下Ｂ（２７）が出て来る。
少し離れた建物の陰には初老の観光
客に変装したマスク姿の旺次郎。

○　カフェ
部下ＡとＢは会社の近くのカフェに
入り、ガラス張りのテラス席に座る。
旺次郎は二人の背後の席に座る。
そこへ上空に飛行機が通過する。
部下Ｂ「（見上げて）……そーいえば飛行機
好きなんでしたっけ？　額御影さんって」
部下Ａ「飛行機ってか戦闘機な、特に米軍の。
闇でパーツとか爆買いしてるらしいけど」

○　倉庫
旺次郎のマイクから聞こえてくる音
声を灯のＰＣで聞いた一同は思わず
ガッツポーズをする。
瑞美「え、てか待って。センセーいつの間に？」
創人「『人を邪道にひっぱり込むため、暗闇の
手下共が真実を言うことがある』ってセリフ
無かったでしたっけ？　シェイクスピアに」
瑞美「あ……」
ＰＣ画面越しに雄と微笑み合う創人。

○　カフェ
ランチにがっつく部下Ａと部下Ｂを
旺次郎が背後から覗き見ている。

部下Ａ「やっと仕事納めか、コッチの仕事は」
部下Ｂ「でも良い年越し出来そーじゃないすか」
部下Ａ「まー調子いーからな、アッチの仕事は。
この間の劇場の１千万とか」
旺次郎「（小声で）クソ、やっぱコイツ等か」
二人を睨む旺次郎だがふいに振り返
った部下Ａと目が合ってしまう。
部下Ａ「ん？　なんだお前人の話勝手に聞いて」
旺次郎を睨みながら席を立つ部下Ａ。

○　倉庫
一瞬にして顔が青ざめる一同。

○　カフェ
ビビって思わず立ち上がる旺次郎。
旺次郎「（焦りながら韓国語で）ど、どうやっ
て行けばいいですかッ？　あ、浅草にはッ！」
部下Ａ「ハ……なんだ日本語分かんねーのか」
旺次郎「（韓国語で）み、見たいんです、雷門」
部下Ａ「何言ってんだコイツ、知るかッ！」
吐き捨てながら腰を下ろす部下Ａ。
ホッと息をつき、座る旺次郎。

○　倉庫
笑顔の一同が旺次郎を出迎える。
瑞美「オージお疲れ様ッ！　グッジョブッ！」
創人「おかげで出来ましたよ、台本が」
ろめお「もう？　流石センセー、早く教えろよ」
創人「はい。まず灯ちゃんが作った腕時計を米
軍の戦闘機の素材で作られた物だとします」
瑞美「うんうん、それで？」
創人「ＳＮＳで腕時計マニア風の偽アカ作って、
額御影に接触して腕時計の闇ブローカーを
紹介すると持ち掛けます」
雄「闇って……一般には流通してないから？」
創人「その通り。で、闇ブローカーの演技して
額御影に腕時計を１千万円で買わせれば
第一回公演は見事エンディングでーすッ！」
思わず声を上げる一同。
ろめお「イケそうじゃねッ？　知らんけど」

旺次郎「っすね。出来るかも、カーテンコール」
瑞美「じゃあ演じちゃいますか、闇ブローカー」
×　　×　　×
除夜の鐘が鳴る中、灯がバラした腕時計の極小パーツを赤く塗装している。
×　　×　　×
年が明け、テレビの正月特番が流れる中、灯がルーペを使って塗装済みの赤いパーツで腕時計を組み立てている。
瑞美はＰＣで戦闘機について勉強中。
そこでスマホを操作していたろめおが青ざめた顔で立ち上がる。
ろめお「ダ、ダメだッ！　額御影は決まった奴からしか腕時計買わねーんだってッ！」
ろめおの偽アカには闇ブローカーの紹介を断る額御影のメッセージ。
瑞美「マジッ？　ど、どうする？　センセー」
リモート画面越しの創人は困り顔で鼻を深く掴んで考える。
灯「……既にいたんですね、闇ブローカーさん」
雄「なら買わないか、知った顔以外からは」
そこで創人がハッと閃き、急いでスマホを操作しだす。
旺次郎「ど、どうした？　センセー」
創人「み、見て下さい、コレッ！」
創人が見せたスマホには『高級腕時計ユーチューバー特集』のネット記事。
トップに『やぶわっきー』こと小太りで金髪の薮脇輝茂（３４）とピンク色の髪で長身女性の相方（３３）の画像。
創人「こ、この人達になり切って額御影に近づきましょうッ！　絶対信用するハズですッ、高級腕時計マニアなら知った顔なんでッ！」
ろめお「マ、マジかよ、実在する人間だぞッ！」
創人「でもバレないと思います、入念にメイクしてマスクもすれば。額御影は普段は画面越しの顔しか見てないでしょうからッ！」
雄「確かに。芸能人も実際見ると結構違うし」
灯「サングラスもかけるとか、有名人っぽく」
瑞美「いーじゃんソレッ！　灯偉いッ！」

旺次郎「でもかなり背高いよ、この女の人」
ろめお「あー、クレア様いたらなー」
嫌味っぽく瑞美をチラ見するろめお。
瑞美「（ムッとして）大丈夫、私やるしッ！」
旺次郎「え、ムリでしょ瑞美の背じゃ……」
瑞美「大丈夫だって。超高いヒール履けば」
創人「でも、正直問題は声ですけどね……」
雄「あ、そうだね……」
灯「なんとかなると思いますよ、変声機で」
瑞美「え、灯作れんの？　そんなの」
灯「市販のＡＩボイスチェンジャーを弄って、首元に着けてマフラーで隠せば大丈夫かと」
旺次郎「いーね。なんとかなりそうじゃん」
創人「よし、じゃあ誰がやるかですが……」
瑞美「体格的にタメオだな、男は」
ろめお「え、俺？　い、嫌だねッ！　だって
バレたら絶対食われんだろ、トカゲにッ！」
瑞美「アンタだって。オージ痩せてるし」
ろめお「腹に詰め物しろよ、俺は絶対嫌だッ！」
瑞美「ハ、なに？　ここまで来てビビリがッ！」
旺次郎「いいよ瑞美、やるよ俺」
ホッとするろめおだが創人がスマホでユーチューブの『やぶわっきーのレア腕時計チャンネル』を再生する……
と、聞こえてきた薮脇の声は関西弁だ。
ニヤリと笑い、ろめおを見る瑞美。
ろめお「……う、嘘やろ……んなアホな……」
×　×　×
薮脇の動画を見て話し方とメイク方法を研究する瑞美とろめおと雄。
灯は変声機の製作に取り掛かる。

○　次原電器店・外観
灯の母が店頭にある正月飾りを取り外している。

○　倉庫
灯が薮脇達に変装したカツラにマスク姿の瑞美とろめおの首元に変声機を取り付けている。

灯「コレが声帯を刺激して声を変えるんです」
ピンバッジ型の小型マイクを付けた
マフラーを巻いて変声機を隠す灯。
灯「タメオさん話してみて下さい、関西弁で」
ろめお「……ホ、ホンマに大丈夫なんやな」
マスク越しに聞こえるろめおの声は
薮脇の声にそっくりだ。
旺次郎「いーね。これなら大丈夫でしょ」
瑞美「灯頑張ったね、偉いッ！」
思わず照れ笑いを浮かべる灯。
瑞美「……じゃあ開演だね、第3幕の」
引き締まった表情でうなづく一同。

○　カフェ
一人でランチ中の額御影がいる。
そこへ変装に加え、サングラスもかけ
た瑞美とろめおが額御影の横を通る。
額御影「(気付く)……あ、ひょっとして……」
緊張気味に振り返る瑞美とろめお。
額御影「薮脇じゃねーか、久し振りだなッ！」
思わず「嘘ッ」と驚く瑞美とろめお。

○　倉庫
脱負け組一同も皆驚きの表情。
創人「マ、マジかッ！　か、顔見りとは……」

○　カフェ
同じ席に着いて話す瑞美達と額御影。
額御影「3年振りか……俺が大阪いた頃だから」
ろめお「そ、そやな。そっちも元気そうやんけ」
額御影「(ムッとして) ハア？　タメロかよ、
やっぱ有名人になると変わるもんだなー」
思わず「ヤバッ」と焦る瑞美とろめお。
瑞美「ゴ、ゴメンなさい。調子乗っちゃって」
額御影「……ま、別にいーけどよ。別れの挨拶
も無しに大阪離れたの俺のほうだし」
ホッと一息つく瑞美とろめお。
額御影「そーいえば薮脇スマホの番号変えた？
前に掛けたけど通じなくてさ」
ろめお「え、は、はい。すんません変えました」

額御影「やっぱりな。じゃあ教えてくれよ」
身を乗り出して瑞美達を見る額御影。
額御影「……ん？　何か変わったな、２人共」

○　倉庫
一同に「気付かれた？」と緊張が走る。

○　カフェ
焦りの表情で見合う瑞美とろめお。
瑞美「さ、３年経てば少しくらいは……」
額御影「まーな。髪の色も変わったしな」
ろめお「そ、そのせいやと思いますけどね」
額御影「てか外せよサングラス。感じ悪いな」
ろめお「え、い、いや……それは……」
瑞美「ゴメンなさい。他の人の目もあるし……」
額御影「（鼻で笑う）なんだ有名人ぶって……
なら別にいーけどそのままで」

○　倉庫
思わずホッとする脱負け組一同。

○　カフェ
瑞美がテーブルの下でろめおの靴を
軽く蹴って合図をする。
ろめお「そ、そや……せ、せっかく額御影さん
に会えたんやからメチャイイ話教えますよ」
額御影「え？　何だよイイ話って」
灯が作った腕時計を見せるろめお。
ろめお「べ、米軍のＦ１５戦闘機の機体から作
られた赤い腕時計です。カッコええでしょ？」
額御影の好反応を期待する瑞美達だ
が……額御影は全く無反応である。
思わず「アレ……？」と焦る瑞美達。
ろめお「未発売品なんです。超レア物でしょ」
瑞美「有志達で作った物なんで、退役軍人の」
額御影は変わらず無表情のまま。
額御影「……Ｆ１５か……いつ頃の機体だ？」
ろめお「……た、確か９０年代前半頃のです」
額御影「そうか……ならコソボ紛争の時位か」
ろめお「そ、そう……（と、うなづきかける）」

瑞美「(慌てて遮る)い、いや、湾岸戦争です。
９０年代末じゃないですか、コソボ紛争は」
額御影「あ……そうか、そうだったな」

○　倉庫
創人「……わざと間違えましたね、今の」
旺次郎「え、何でそんな事……？」
創人「用心の為でしょう。イイ話ってのが信用出来るモノかどうか見極めようとして……
流石裏社会を生き抜いてきた男ですね……」
雄「そ、そっか……大丈夫かな二人共……？」

○　カフェ
瑞美達は疑われまいと話を続ける。
瑞美「湾岸戦争って言えば実はこの機体、砂漠の嵐作戦にも参加してたモノらしいですよ」
ろめお「ステルス機のパイロットウォッチはあったでしょ。でも実際の機体はレアですって」
瑞美「ガラス部分はコックピットの物で、ベルトはシートベルトから作ったんです」
額御影「……そうか……なら金属部分は？」
瑞美「当然チタン。Ｆ１５と言えばですから」
ろめお「赤色は星条旗の塗装に使われた物です」
瑞美達が事前に身につけた知識によって警戒心の薄れた額御影はようやく身を乗り出して時計を凝視する。
額御影「……流石藪脇、やるな(と、微笑む)」
ろめお「ハハハ、喜んで貰えて良かったです」
額御影「……で、売値は？」
瑞美「それが……破格の１千万円なんです」
途端に額御影の顔から笑みが消える。
額御影「……無理だ。出せて５００万てとこか」
瑞美「そ、そんな。他に無いですよ、こんなの」
ろめお「ホンマですよ。安過ぎるくらいですわ」
少し考えるも……首を振る額御影。
思わず「え……」と肩を落とす瑞美達。

○　倉庫
灯が曇り顔で戻って来た瑞美とろめおの首元から変声機を外している。

灯「メチャ勉強した成果出たね、瑞美ちゃん」
瑞美「うん……会話は大丈夫だったけどね……
でもどーしよセンセー、５００万円だって」
創人は困り顔でより深く鼻を掴む。

○　額御影の会社・前の道
黒塗りのミニバンが停車し、橘と刑事
Ａと刑事Ｂが降りて来る。

○　倉庫
雄が盗聴器用のＰＣに耳を寄せる。
雄「ね、ねえ、会社に刑事来たっぽいよッ！」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
橘が微笑みながらソファーに座る。
目の前には笑顔の額御影と部下Ａ。
部下Ａ「どういった御用件でしょうか刑事さん。
こんな健全なコンサルティング企業に」
橘「まあ、アドバイスをお願いしたくてね……」
額御影「……どんな事ですか？」
橘「詐欺師集団の捕まえ方ですよ、全国を転々
としてるゲスいヤツらのね」
額御影「……さあ……専門外ですからねぇ」
作り笑顔で微笑み合う橘と額御影。
橘「ではこれは分かるでしょ、会社名の由来は」
額御影「はい、勿論……ソレが何か？」
橘「……カウダ……ラテン語で尻尾って
意味ですよね？」
ニヤリとほくそ笑む橘。
額御影も表面上は笑顔を崩さない。

○　倉庫
緊張気味に盗聴器の音を聞く一同。

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
橘が微笑みながら席を立つ。
橘「では額御影ＣＥＯ、また……」
笑顔で橘達を見送る額御影だがドア
が閉まった途端に鬼の形相に変わる。
額御影「や、役員会議開けッ！　今すぐだッ！」

部下Ａ「え、ど、どうしてですかッ？」
額御影「決めんだよッ！　次のＣＥＯをッ！」

○　倉庫

驚きの表情で盗聴器の音を聞く一同。
瑞美「コ、コレって逃げるつもりかな……？」
創人「ですね。早くしないと……」
そこへドアをノックする音。
灯の母の声「みんなー、おやつ持って来たよー」
慌てて『一幕入魂』の横断幕を外し、
変装道具や機械類に被せて隠す一同。
そこへ灯の母が入って来る。手には茶
碗とお汁粉の入った鍋を乗せたお盆。
灯の母「差し入れよ。お正月の残り物だけど」
ぎこちない作り笑顔で出迎える一同。
灯の母は相方と薮脇の変装のままの
瑞美とろめおに気付く。
灯の母「アレ……？　あなた達新メンバー？」
一瞬「ん？」と戸惑うもすぐに察して
愛想笑いを浮かべる瑞美とろめお。
瑞美「は、はい、そうなんです……」
灯の母「（驚いて）え、あなたの声瑞美ちゃん
にそっくりね」
思わず「マズッ」と顔をしかめる一同。
瑞美「（声色を変えて）そ、そうですかぁ？」
灯の母「……ん……気のせいか。ゴメンなさい」
ホッと息をつく一同。
棚に並ぶ機械のパーツを見る灯の母。
灯の母「……またこんなガラクタばっかり」
灯「結構売れるんだって、オークション出せば」
灯の母「はいはい……じゃあ皆、頑張ってね」
微笑みながら出て行く灯の母。
途端に大きく息をつく一同。
そこで創人がハッと閃く。
創人「そ、そうだッ！　オークションだッ！」
ろめお「ハ、どーいう事？　センセー」
創人「偽物のオークション会場のセット作って
ネット中継するんですッ！　で、皆で入札を
して価格競り上げて１千万円になった時に
額御影に落札させるんですッ！」

瑞美「へー凄いッ！　いーじゃんソレッ！」
旺次郎「でもどこに作る気？　セットなんて」
創人「大丈夫です。ネットだから背景だけで」
ろめお「そっか、ならここでも出来んじゃん」
創人「灯ちゃんフェイクのオークションサイト作れる？　スマホで入札出来るヤツ」
灯「うん、やってみる」
創人「よし……どーですか？　ブチョミさん」
瑞美は気合の入った表情でうなづく。
瑞美「……じゃあ皆、第４幕始めるよッ！」
×　×　×
壁にオークション会場に見えそうな大理石柄の壁紙を張る瑞美とろめお。
雄はタキシード姿の旺次郎にメイク。
偽のオークションサイトが表示されたＰＣを見てスマホを操作する灯。
灯「よし出来た。入札スマホでオッケーです」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
逃亡の為に荷物をまとめる額御影。
そこへスマホに着信がある。
額御影「……薮脇か、どうした？　ん、なに？　会員制のネットオークション……？」

○　倉庫
変声機を使ってスマホで話すろめお。
ろめお「はい。こないだの腕時計出品しますんでどうかと思って……」
額御影の声「いや無理だ。今取り込み中でな。てかアレにマジで１千万の価値あんのか？」
思わず「疑ってる？」と見合う瑞美達。
ろめお「な、ならオークション参加すれば価値分かるんやないかと思いますけど……」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
スマホを持ったまま考える額御影。

○　倉庫
リモート画面越しに創人が出したカンペを読むろめお。

ろめお「じ、実はユーチューブで紹介する予定
あって、そこで買い手見つかるかもですけど」
額御影の声「ま、待てッ！　分かった参加する」
思わずガッツポーズし合う瑞美達。
ろめお「ほ、ほなＵＲＬと招待ＩＤ教えますね」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
額御影がＰＣに表示された偽のオー
クションサイトにログインする。
画面には偽のオークション会場が映
り、ホスト役に変装した旺次郎がいる。

○　倉庫
緊張気味に灯のＰＣを覗き込む一同。
額御影がログインした表示が出る。
瑞美「キ、キタッ！　皆準備はいいッ？」
うなづいてスマホを握り締める一同。
離れた場所にある壁紙だけのオーク
ション会場には旺次郎がいる。
旺次郎「次は本日の目玉ッ！　Ｆ１５戦闘機の
素材で作られた未発売の超レア物ですッ！」
変装した雄が腕時計を運んで来る。
旺次郎「では、百万円からスタートですッ！」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
ＰＣを凝視する額御影。
金額はどんどん吊り上がっていく。
額御影「……ん？　思ったより上がるな……」
あっと間に４００万円越えである。

○　倉庫
スマホの画面に金額を入力する一同。

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
さらに値が吊り上がっていく。
意を決した表情の額御影が『５００万』
と金額を入力する。

○　倉庫
値の付いたＰＣ画面を見て喜ぶ一同。

瑞美「キタッ！　皆どんどん行くよッ！」
　勇んでスマホに金額を入力する一同。

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
　『７００万』と入力する額御影。
額御影「(大きく息をつく)……ここまでだな」
　マウスから手を離し、席を立つ額御影。

○　倉庫
　灯が盗聴器用のＰＣの音に反応する。
灯「……あ、入札やめたっぽいです」
瑞美「エッ！　クソ、やっぱ無理か１千万は」
ろめお「でもこれで７００万は取り戻せるよな」
瑞美「でも、まだ全然足りないじゃん」
ろめお「……なんとかするよ、足りない分は」
瑞美「え……そ、そんな、だってまだ……」
雄「……そのほうがいいかも、何も無いよりは」
　灯も「ですね……」とうなづく。
瑞美「え……で、でも……」
ろめお「もう十分だよ、ありがとなブチョミ」
　瑞美は不満気な表情だが他のメンバーが皆納得の表情なのに気付く。
瑞美「……分かった。もうやめよセンセー」
　鼻を掴んでいた手を静かに離す創人。
創人「いや、まだです」
　『１０００万』と入力する創人。
ろめお「オ、オイッ、お前何してんだよッ！」
瑞美「１円も返って来ないよッ、コレじゃッ！」
創人「大丈夫です。灯ちゃん、終了させて」
灯「え、は、はい……」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
　終了したオークションの画面を驚きの表情で見つめる額御影。
額御影「……マ、マジか、本当に１千万……」

○　倉庫
　険しい顔の瑞美達がリモート画面の創人に詰め寄る。
瑞美「ちょっとッ！　どーいうつもりッ？」

ろめお「取り返せたのによッ、７００万円ッ！」
創人「大丈夫です。今額御影は絶対に落札出来なかった事を後悔して悩んでるはずッ！
シェイクスピアの一番有名なセリフにもあるでしょう、『To be or not to be, that is the question』ってッ！」
思わず「え？」と動きを止める瑞美達。
そこへろめおのスマホに着信がある。
創人「ほらキタッ！　早く変声機着けてッ！」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
鼻息荒くスマホを握り締める額御影。
額御影「薮脇かッ？　さっきの腕時計またすぐ手に入れろッ！　ああ、次は絶対買うッ！
なに？　いいからとにかく早くだ、急げッ！」

○　倉庫
キツネに包まれた様な顔のろめおが電話を切り、変声機も外す。
ろめお「……か、買うって……１千万で……」
瑞美「う、嘘ッ！　マジでッ？」
黙ってうなづくだけのろめお。
旺次郎「ス、スゲーッ！　流石センセーッ！」
思わず照れ笑いを浮かべる創人。
瑞美「よしッ、じゃあまた行くよタメオッ！」

○　警察署・外観（朝）
朝日を浴びる都内の警察署の全景。

○　同・刑事課（朝）
橘と刑事Ａが話している。
そこへ刑事Ｂが駆け込んで来る。
刑事Ｂ「橘さん逃げそうです、額御影がッ！」
橘「な、なにッ？」
刑事Ｂ「会社から荷物を運び出してるようで」
刑事Ａ「クソッ！　アイツまたかッ！」
橘「行くぞ尻尾のあるうちにトカゲ狩りにッ！
いいですよねッ？　課長ッ！」
上司の机を見る橘だが不在である。
橘「アレ、課長……どこ行った？」

○　倉庫（朝）
古めのテレビには七草粥を作る様子
を伝える朝のニュースが映っている。
それを脱負け組一同が見ている。
瑞美とろめおは薮脇と相方に変装済。
瑞美「……もう終わっちゃうね、冬休み」
旺次郎「いよいよだね、最終の第５幕は」
ろめお「これで決まるな、喜劇か悲劇かが」
創人「……では僕も家で様子聞いてますから、
頼みますよ、ブチョミさん」
気合の入った表情でうなづく瑞美。

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
テーブルの上には灯が作った腕時計。
それを満面の笑みで見つめる額御影。
その前にはサングラスにマスク姿で
変装した瑞美とろめおがいる。
ろめお「大変でしたわ、また手に入れんの」
額御影「流石だな、やぶわっきー……オイ」
額御影に促された部下Ａが１千万円
の入った紙袋をテーブルに置く。
思わずつばを飲み込む瑞美とろめお。
額御影「じゃあ……乾杯するか、再会を祝して」
部下Ａが持って来たのは高級ワイン。
思わず「マジッ？」と固まる瑞美達。
額御影「飲もーぜ。二人共好きだろ、ワイン」

○　創人の家・創人の部屋
ＰＣでマイクの音声を聞く創人。
創人「マズいな、コレは……」

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
部下Ａがグラスにワインを注ぐ。
ろめお「で、でも、お、お酒はちょっと……」
瑞美「そ、そう、帰ってすぐ撮影しないと……」
額御影「ハア？　酒飲みながら腕時計紹介する
回とかあったろ。いーから遠慮すんなって」
渋々マスクを少しずらして口元を隠
しながらグラスに口を付ける瑞美達。

額御影「(笑って)なんだお前ら、その飲み方」
ろめお「で、でも美味し……ウ、グ、ゲホッ！」
思わず咳込み、喉元を抑えたろめおが
マイクごと変声機を掴んでしまう。

○　創人の家・創人の部屋
ＰＣにマイクのバキバキッという音
が入って思わず顔をしかめる創人。

○　額御影の会社・ＣＥＯ室
激しく咳込む瑞美とろめお。
額御影「……どーした？　酒強いだろお前ら」
ろめお「い、いや、メチャ美味いんですけど」
変声機が壊れ、ろめおの声は地声だ。
思わず「ヤバッ！」と見合う瑞美達。
額御影「(眉を顰めて)ハ……？」
部下Ａ「な、何だその声ッ！　お前誰だッ！」
慌てて立ち上がり、逃げようとする瑞
美とろめおに部下Ａが立ち塞がる。
瑞美は不慣れなハイヒールのせいで
転ぶもサングラスを気にし過ぎて脱
げたヒールを履かずに立ってしまう。
額御影「……そんな背低かったか？　お前……」
瑞美達を睨みつけ、立ち上がる額御影。
額御影「……成程。ずっと成り済ましてたって
訳か、藪脇達に……ダメだろ、詐欺なんかし
ちゃ……一生懸命マジメに働いて、社会に貢
献して、俺等みてーに頭の良い人間の生き方
しねーと、社会の勝ち組の生き方をなッ！」
怯えて震えるだけの瑞美とろめお。
額御影「ってことはゴミかこの腕時計は、お前
らと一緒で……悪影響だよな環境に。なら
処分しねーとなゴミはッ、負け組はーッ！」
鬼の形相の額御影がワインの瓶を叩
き割って瑞美の首元へ突き付ける。
思わず顔を引きつらせ、のけぞる瑞美。
そこへ部下Ｂが駆け込んで来る。
部下Ｂ「あ、あの、警察がッ！　それも橘さん
の上司って人がッ！」
額御影「な、なにッ？」

咄嗟にワインの瓶を捨てる額御影。
そこへマスク姿の中年女性の上司と
初老の男性刑事Ｃが入って来る。
額御影「……ハ、ハハ、ちょうど良かった」
上司「……なに？　どういう事だ」
額御影「コイツら詐欺師ですッ！　１千万円騙
し取ろうとしたんですよッ！　ゴミ同然の
腕時計に法外な値段付けてねッ！」
思わず「ヤバ……」と見合う瑞美達。
上司「……そうか、類は友を呼ぶだな」
額御影「何言ってんすか、早く逮捕してくれよ」
上司「分かった。署で話を聞く。お前達も来い」
額御影「え、何でッ？」
上司「被害者だろ、事情説明してくれよ」
刑事Ｃ「でも、今車一台しか有りませんが……」
上司「じゃあ応援呼びましょう……コレか？
その腕時計と騙し取られそうになった金は」
灯が作った腕時計と１千万円の入っ
た紙袋を押収する上司。

○　同・ビルのエントランス
上司と刑事Ｃに連れられた瑞美とろ
めおが出て来る。
ろめお「（小声で）……ブチョミどーする？」
瑞美はうつむいて首を振るだけ。
ろめお「（小声で）……クソ、ポンコツ部長」
刑事Ｃ「オイッ！　早く乗れッ！」
瑞美とろめおを路肩に停めてあった
黒塗りのミニバンに押し込む刑事Ｃ。
そこへ遠くから近づいて来る警察車
両のサイレンの音が聞こえだす。

○　ミニバンの車中
颯爽と運転席に乗り込む上司。
上司「じゃあ行くか……頼むわ、運転」
そこへ後ろのラゲッジスペースから
顔を出したのは……灯だ。
ろめお「（驚いて）ヴェッ！　あ、灯ちゃんッ？
な、何でッ？　何でココにいんのーッ？」
ニヤリと笑い、ＰＣを操作する灯。

すると……『ＡＵＴＯ　ＤＲＩＶＥ』
の表示が点灯して車が動き出す。
上司がハイネックのセーターの首元
から取り出したのは……変声機だ。
上司「（ニヤリと笑って）逮捕するぞ、タメオ」
マスク越しの声は……久麗亜である。
刑事Ｃも変声機を取り出す。
刑事Ｃ「今年は留年するなよ、ろめお先輩」
マスク越しの声は旺次郎である。
驚きの余り言葉を失うろめお。
瑞美「やった、やったねッ！　みんなーッ！」
嬉しそうにハイタッチする一同。
ろめお「エッ！　ブ、ブチョミ知ってたんッ？」
瑞美「当然でしょ。知らないのはタメオだけ」
ろめお「え、な、何でだよッ？」
久麗亜「自然な演技して貰う為だよ、タメオに」
運転席で微笑む久麗亜がハンドルを
握っていない事に気付くろめお。
ろめお「ヴェッ！　ハ、ハンドル握ってッ！
て、てか久麗亜免許ッ！　免許はーッ？」
灯「大丈夫ですよ、自動運転モードなんで」
ニヤけ顔で『ＡＵＴＯ　ＤＲＩＶＥ』
の表示を指で指し示す灯。
ろめお「え……マジ？　てかなんなんこの車？」
旺次郎「パパの黙って借りた。今出張中だから」

○　倉庫（朝・回想）
テレビ画面には七草粥のニュース。
倉庫を出て行く瑞美とろめお。
それを倉庫の陰から見ていた久麗亜
が素早く中に入って来る。
雄は急いでメイクに取り掛かる。

○　旺次郎の家・駐車場（回想）
灯と変装を終えた久麗亜と旺次郎が
黒塗りのミニバンに乗り込む。

○　ミニバンの車中（回想）
ＰＣを操作してハッキングする灯。
『ＡＵＴＯ　ＤＲＩＶＥ』が点灯する。

○　額御影の会社・ＣＥＯ室（回想）
　部下Ａが高級ワインを持って来る。
○　創人の家・創人の部屋（回想）
創人「マズいな、コレは……ならここで」
　素早く久麗亜にメールを送る創人。
○　額御影の会社・前の道（回想）
　路肩に停めたミニバンの車中で創人
　からのメールを見る久麗亜。
久麗亜「キタッ！　オージ行くよッ！」
　急いで変声機を首に着ける久麗亜。
○　ミニバンの車中
　経緯を聞いて愕然とするろめお。
ろめお「な、ならさっきの失敗も計画通り？」
瑞美「流石にソレは無い。でも成功しても偽の
　腕時計って事はすぐにバレるでしょ。だから
　怒った額御影から皆が危険な目に合わない
　様にってセンセーが考えたの」
　ニヤけ顔で腕時計を振り回す瑞美。
○　額御影の会社・ビルの非常階段
　階段を駆け下りる額御影と部下達。
部下Ａ「見張りも残さず出て行きやがって、
　無能のアホ警察共がッ！」
部下Ｂ「でもいいんすかッ？　１千万円ッ！」
額御影「安いもんだろッ、捕まらねーならッ！」
　騙されたとは知らずに高笑いをしな
　がら階段を駆け下りて行く額御影。
○　同・ＣＥＯ室
　勢いよく橘と刑事達が駆け込んで来
　るが既にもぬけの殻。
橘「ク、クソッ！　遅かったかッ！」
○　ミニバンの車中
　話を聞いたろめおに笑顔が戻る。
ろめお「ならハッピーエンドだな第一回公演は」

瑞美「うん。でもまだあるから、エピローグが」

○　ろめおの家・玄関

曇り顔の支配人がドアを開ける。
上司の姿のままでマスク姿の久麗亜
が警察手帳を見せる。

支配人「え……刑事さん？　どないしました？」
久麗亜「（笑顔で）取り戻せたんですよ、お金」
支配人「え……ホ、ホンマですかッ？」
久麗亜「はい。ここに1千万円入ってますから」
笑顔で支配人に紙袋を渡す久麗亜。
支配人「……ホ、ホンマや……よ、良かった。
ホンマに良かった……これで、これで続けら
れるわ皆の為に劇場を……演劇を……あり
がとう刑事さん、ホンマにありがとう……」
紙袋を抱えながら泣き崩れる支配人。

○　ミニバンの車中

少し離れた場所から様子を伺う一同。
ろめおは泣き崩れる父親の姿を見た
途端に号泣し始める。
瑞美達の目からも嬉し涙が溢れ出す。

○　倉庫

変装を落とした一同が戻って来る。
出迎えた雄と創人と満面の笑みで
ハイタッチをする一同。

瑞美「あ、来れたんだセンセーッ！」
創人「はい。親戚に頼めたんで、お父さんの事」
ろめお「……やっぱ俺だけか、知らなかったの」
灯「でも、私とオージさんと雄さんが久麗亜
さんの事を聞かされたのは昨日なんですよ」
ろめお「え、そーなの？」
瑞美「うん。最初から知ってたのは私と久麗亜
とセンセーだけ」
ろめお「ってことは……あ、あの喧嘩って……」
瑞美「そう、全部演技だから」

○　倉庫（夕方・回想）

カーテンコールを終えた一同。

壁に張り終えた『一幕入魂』の横断幕
を久麗亜が一人で見つめている……
と、そこへ瑞美がそっと近づく。
瑞美「(小声で)ねえ、話があるんだけど……」

○　次原電器店・裏庭（夕方・回想）
二人きりで小声で話す瑞美と久麗亜。
久麗亜「……え、わざと喧嘩して……？」
瑞美「うん。別行動お願い。で、ここぞという
時にまた出て欲しいの。どう？　センセー」
瑞美のスマホには深く鼻を掴んで考
えるビデオ通話中の創人の姿。
瑞美「必要だと思うの、高校生だけじゃ上手く
いく可能性低いし……何かあった時の為に」
創人「……そうですね。良い案だと思います」
久麗亜「でも、詐欺師の他に皆も騙すって事で
しょ……出来るかな？　負け組の私に……」
瑞美「お願い。コレ頼めるの久麗亜だけだから
……正直私は敵わないから久麗亜には……
廃れた演劇部魂と朝が来ても必ず覚める夢
だけだし、私が持ってるモノと言えば……」
久麗亜「瑞美……」
瑞美「……私には無いモノ持ってるでしょ？
久麗亜は。私みたいな無能で弱い人間が持っ
てないモノッ！　お願い、お願いだから見せ
て、有能で強いアンタの演劇部魂をッ！」
久麗亜は暫く悩むも……うなづく。
瑞美「え、ホ、ホントにッ？」
久麗亜「うん……なんとかやってみる」
瑞美「あ、ありがとう久麗亜。マジ助かるッ！」
久麗亜「まあ私だけだもんね、プロは……でも
私に無いモノ持ってんじゃん、瑞美だって」
瑞美「え……なに？」
久麗亜「なにって……『愚者は己が賢いと考え
るが賢者は己が愚かなことを知る』だよ」
瑞美「え……シェイクスピアのセリフ……？」
久麗亜「そう。ホントに強いのは瑞美の方だよ。
だって、マジで強い人ってのは自分の弱さ
を認められる強さを持った人だと思うから」
瑞美「く、久麗亜……」

久麗亜「普通はムリだって、自分の弱さ認める
なんて。特に今の令和人って他人の汚点には
厳しいくせに自分の欠点だけは隠して詐欺
まがいに聖人君子演じながら生きてるクソ
大根役者ばっかじゃん。まあ、私もだけどさ。
だから凄いよ、その強さ持ってる瑞美は……」
はにかみながら瑞美を褒める久麗亜。
瑞美も嬉しそうに微笑み返す。

○　倉庫

経緯を聞いて思わず唸るろめお。
創人「流石部長ですね、僕も勉強になりました」
瑞美「（照れ笑い）いやいや……でも久麗亜、
もう少し後の予定じゃなかった？　喧嘩」
久麗亜「え、そう？　いーじゃん成功したなら」
意味有り気に旺次郎を睨む久麗亜。
旺次郎は「ハ……？」と怪訝な顔。
そこで笑顔の雄が瑞美の手を握る。
雄「……ありがとね、ブチョミちゃん……私に
将来の夢持たせてくれて……」
瑞美「え、夢って……？」
久麗亜「目指すらしいよ、プロのメイクさん」
旺次郎「マ、マジかッ！　頑張れよ雄ッ！」
満面の笑みでうなづく雄。
笑顔の一同だが灯だけ突然泣き出す。
瑞美「……ど、どうしたの？　灯」
灯「……ご、ごめんなさい……もう、もう終わ
っちゃうんだって思ったら……こんな、こん
な楽しかったこと今まで無かったから……」
寂し気に涙を拭う灯を見つめる一同。
ろめお「……あるって、これからだって」
ろめおはＰＣ脇に置いてあった灯の
ＭＰ３プレーヤーを再生する……と、
山下達郎の『ずっと一緒さ』が流れる。
思わず「え……」と泣き止む灯。
ろめお「なってよ、脱負け組専属小道具係に」
灯「え……い、いいの？　瑞美ちゃん」
瑞美「勿論ッ！　ずっとずっと一緒だよッ！
それに、脱負け組は誰でも大歓迎だからッ！
夢と演劇部魂さえあればねッ！」

満面の笑みで壁に張られた『一幕入魂』
の横断幕を見つめる瑞美。

○　次原電器店・店内
灯の母が店番をしている。
そこへ脱負け組一同が顔を出す。
灯の母「あら……どうしたの？　勢揃いして」
瑞美「……旗揚げ公演終わったんで、お礼に」
灯の母「え、そうなの？　私観てないけど」
灯「またやるから大丈夫。次は絶対招待するし」
微笑む灯の手には埃の被った高校の
制服が入った紙袋。
灯の母「(気付く)ソ、ソレどうするの？　灯」
灯「……処分しようと思って、もう要らないし」
思わず「え？」と眉を顰める灯の母。
瑞美「……始めたいそうです、通信制の高校」
灯の母「え……通信制？　そ、そうなの灯？」
灯「うん。紹介されたの、演劇部の友達から」
満面の笑みで創人を指さす灯。
灯の母「そ、そう……あ、灯が友達から……」
灯「……ダメ？　お母さん」
灯の母「う、ううん、ダメな訳ないじゃない」
灯「やった。お母さんありがと」
控え目だが嬉しそうに喜ぶ灯。
それを見た灯の母の目から途端に涙
が溢れ出す。
灯の母「……よ、良かった……本当に良かった
……あ、ありがとう瑞美ちゃん……本当に、
本当にありがとね皆……良かったね、灯……」
思わず顔を覆って号泣しだす灯の母。
それまで笑顔だった灯も母親の泣き
崩れる姿を見た途端に制服を抱えた
まま嗚咽をこらえ始める。
見守る一同も溢れ出る涙を拭う。

○　瑞美の高校・教室
T『半年後』
梅雨の中休みの午後の日差しが差し
込む教卓の花瓶にはアジサイの花。

窓際の席では夏服の瑞美と瑞美の母
と教師の宇都宮で三者面談中である。
机の上にある『進路希望調査票』には
半年前と変わらず『舞台役者』の文字。
隣には『脱負け組劇場改装記念公演
脚立の上のカーテンコール』のチラシ。
瑞美達が倉庫で撮ったカーテンコー
ルの写真が印刷されたチラシを不満
気に睨みつける瑞美の母。

瑞美の母「もう、受験近いのにこんなの始めて」
瑞美「ちゃんとやってるし、勉強だって」
瑞美の母「そうじゃなくて、現実見なさいって
事ッ！　いつまで下らない夢見てんのッ！」
瑞美「下らなくないってッ！　ちゃんと人の役
に立つこと分かったし、演劇だってッ！」
瑞美の母「な、何よソレ。ホントに演劇バカね。
マジで頭の悪い人だって思われるよ」
瑞美「いいのッ！　私はあえて頭が悪い人間の
人生を選ぶからッ！　『愚かな知恵者になる
よりも利口な馬鹿者になれ』だからッ！」
瑞美の母「ハ……な、何ソレ？」
瑞美「セリフだよ、シェイクスピアのッ！」
瑞美の母「またなに訳分かんない事言って……
やめさせて頂けません？　宇都宮先生」
溜息交じりにうなづいた宇都宮がふ
と窓の外を見るとまた庭木の枝に鳥
がいる。
宇都宮「……瑞美、鳥だってああやって賢く枝
に掴まってるだろ。まだ分からないのか？
人間はな、絶対に空は飛べないんだぞ」
瑞美「……はい。でも……私飛べると思います、
今なら」
清々しい表情で窓の外を見る瑞美。
その目線は庭木の枝に退屈そうに掴
まっていた鳥を勢いよく飛び越し、
その奥に広がっている澄み切った広
大な大空に向かって羽ばたいていく。
【終】